
鎮魂歌（レクイエム）は混沌の彼方に

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レクイエム
鎮魂歌は混沌の彼方に

【Nコード】

N8218V

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

雑誌記者仙道由里は、ある日デスクから？東日本大震災の今？を取材して書けと依頼を受ける。戸惑いつつも入った現地には今なお目を覆いたくなるような惨状と、都会暮らしの由里には想像すら及ばない現実があった。

協力者の力を借り、彼女が書こうとしたものは――

この作品は自身のブログ記事を加筆・修正して転載したものです。

仙道由里

「だからさあ、被災地の今を女目線で見た記事が欲しいんだよ。報道されない真実ってヤツをな。何も手弁当でやれって言ってる訳じゃない。出張費もはずむ。俺は君の文章力を買っているんだ」

はあ、と曖昧に答えて自分の考えに沈み込む。

何で今更？ 何であたしが？ それが正直なところだった。デスクの口にした女目線という言葉にも引かかる。せめて、女性目線と言えないものだろうか。彼の物言いは『記者に男も女もない、仕事さえ出来れば差別はしない』と、公言して憚^{はばか}らない自身のイデオロギーを反証していた。

種々の報道を見る限り、原発事故以外は収束の気配を見せ、復興に向かっているように思える。被災後、すぐに現地入りした先輩記者達が、散々書き散らかし咀嚼^{そしゃく}し切った事案に、自分が書くものなと残っているのだろうか。宿泊施設の機能さえ不明瞭な被災地だった。温かくなったとは言え、未だ氷点下を記録する朝もあるという。つい先日、衣替えを済ませたばかりで、再び冬物を引っ張り出さねばならないのも億劫^{おびやく}に感じた。

『リスクヘッジを脅^{おびや}かす過剰なレバレッジ率』経済学者を取材し、デリバティブの危険性を書いた記事は大震災に掻き消され、陽の目を見ることはなかった。しかし、それが株価の急落を招くと個人投資家の多くが自己破産を申し立て、ネット証券会社には百億にも上ろうかという貸倒損失^{かしたおれ}を生み出したという。没記事^{ぼつきじ}となったそれを裏付けたのが大震災だったのは皮肉といえよう。

現地から送りつけてくるデータメな文章の推敲^{すいこう}ばかりを受け持たされていた現状から抜け出せるチャンスではあったが、デスクのいった報道されない真実というものが私に見つけられるのだろうか。おざなりの記事しか書けなければ、更に自身の評価を下げるのではないかといった危惧もあった。気乗りしない依頼であることは間違い

ない。

仙道由里は二十五歳。地元の大学を卒業後、この出版社に入って四年目になろうとしていた。希望していた文芸誌にポストはなく、この写真週刊誌に記者として配属される。ならばノンフィクションライターとして確固たる地位を築いてやろうと腕ぶしてはみたのだが、記者とは名ばかり、推敲担当の現状に骸肉之嘆ひにくのたんをかこう毎日だった。

肩までの髪をポニーテールにまとめ、聡明そうな広い額と意志の強さを湛たたえる切れ長の瞳は、端正だが、そこはかかない儚はかなさを感じさせる。バランスの取れた四肢と姿勢の良さは、彼女の身長を實際の百六十五センチより高く見せていた。

アイメイクのみ、ピアスなし、ネイルなしで、あまり笑顔を見せないせいもあったのだろう。他人を寄せ付けけない雰囲気まことを纏まとう由里に、気安く声を掛ける同僚は少なかった。

電力会社や経産省の官僚、おちよぼ口の官房長官達が繰り返す

『ただちに健康に影響を及ぼす数値ではない』との文言には違和感を覚えた。放射線障害は挽発性ばんぱつせいだ。その言葉に担保能力たんぽのうりよくがないことなど、中学生でも分かる。読者の目を引くような新事実に巡り逢えなければ、原発事故の影響が残る地にも足を伸ばさねばならないのではないだろうか。鬱塞うつそくが蔓延はびこる屋根へと躊躇ためらいがちに手を伸ばす。

「今、かかっている原稿はどうしましょう」

「それを書き上げてからでいい。あの有様ありさまだ、一日や二日到着が遅れたところで、被災地の状況に大した変化もないだろう。。じゃあ、頼んだぞ。車は持ってたよな。まだまだ、あっちではガソリンは貴重品だそうだ。現地に入る前に満タンにしておけよ」

「車で行けってことですか？」

「当たり前だろう。あっちじゃあ、まだ全ての交通機関が復旧し

ている訳ではない。そうでなくても、車がなければ不便な地方なのだから。いい記事を期待しているぞ」

仕方ない。ここで断れば、また推敲に明け暮れる日々が待つのみだ。病気がちな母を独りにして家を空けるのは気が重かったが、苦境を成功への扉と変えた先人達に倣^{なら}ってみよう。鬱^{ふさ}ぐ気分^{むち}に鞭^{むち}を入れ、固い表情で頷く。

「わかりました。行きます。私が書く予定だった、統一地方選の記事はどうなりますか？」

「あれは、谷口に任せる。こんな時期でさえ他政党の攻撃に終始するだけの連中だ。どこが議席を占めようと、何も変わりやあせんよ。被災地には迷惑千万な選挙だつてことぐらい、あの子にも分かっているはずだ。お手並み拝見と行こう」

入社二年目の谷口晴美は、同性の由里から見てもチャーミングな笑顔の持ち主で、男性記者達の受けは、すこぶる良かった。しかし、客観性に欠け、終助詞の多用される文章は、お世辞にも記事向きとはいえない。おそらく蠱^{ひいき}真^まの作家でも真似ているのだろう。見かねて、意見をすることもあったが「私は、こうしか書けないんです」と、甘えた口調だが明瞭な輪郭をもった拒絶が返ってきた。「この編集室じゃあ、二人きりの女性部員だ、面倒を見てやってくれ」そう、編集長に頼まれてはいたが、以来、彼女の記事に口出しをすることはなかった。由里を飛び越えてデスクに届くそれは、シュレッダー行きとなっていたはずだった。

『君の文章力を評価する』と、いった舌の根も乾かないうちに、その代理に谷口晴美を指名するデスクに、同列の評価をされたような気がして、痛くプライドが傷つく。

女は愛嬌^{あいきょう}か：使い古された言い回しが頭を過ぎ^より、徒労感が湧き起こる。諾否^{たくひ}の返答を急ぎ過ぎたのでは？　しかし、これは依頼でも提案でもない。デスク直々の命令ともいってもよいだろう。今更、不満を口にすれば彼の機嫌を損^もなうだけだった。軽く唇を噛みしめた由里は、沈黙を以^もって抗議に代えようとするのだが、かかつてき

た電話を合図に、会話の終了を告げられる。

「発てる準備が出来たら知らせてくれ。以上だ」

束の間のアタラクシア

「取材の間だけよ、せいぜい五日つてとこなんだし」

——ただどなあ、由里だって知ってるだろう、恵子とおふくろの相性が悪いことぐらい。

「だからって、母さんを一人にしては、おけないでしょう。いつかみたいに発作が起きたらどうするのよ」

——救急車ぐらいは、呼べるさ。そのための、かんたん携帯じゃないか。

「もう、いい。母さんに何かあったら、兄さんのせいだからね」
乱暴に携帯電話を閉じる由里に、傍らで様子を見守っていた母が言った。

「私なら、大丈夫よ。このところ手の震えも出ないし、お医者様も、不整脈じゃなく甲状腺機能「いっじょうせんきのう」の低下かも知れないっていつてらしたでしょう。お薬が効いてるのね。気分も、いいもの」

確かに、暮れに胸が苦しいといって救急車で運ばれて以来、発作は起きてないし、血色も良いように見える。だが、原因が突き止められた訳でもなければ、完治を言い渡されたでもない。そんな母を残し家を空けることに、割り切れなさの残る由里だった。横浜に住む兄に留守の間、母の面倒を頼もうとかけた電話は、予想通りの結果に終わっていた。

母の体調より、妻のご機嫌とりに重きを置くようにとれた兄、久典ひさのりの発言に憤りいぎどおを覚えずにはいらなかった。それが、図らずも強い口調となって母へと向かう。

「先生だって、まだ分からないって、いつてらしたじゃない。油断は禁物よ。それに甲状腺機能に問題があるのだって、決して安心出来ることじゃないんだから」

「こんな症状が出たら注意なさいってことは聞いてます。ずっと、そんな風には、なつてないわ。私は、由里の記事が読みたいのよ、

頑張って行つてらっしゃいな。たった五日ぐらい大丈夫だつてば。ほら、これに久典の電話場番号も入ってるし、いざとなれば百十九番だつて呼べるんだから」

母の誕生日に兄が贈った、かんたん携帯を嬉しそうにかざす。何て気の効かないプレゼントだろうと思つたそれが、忘年会の席に居た由里に母の発作を知らせてきたことが一層、癪に障つたものだった。私はまだ、取材に行かないで済む理由を探しているのだろうか。母の気丈な言葉に、内なる迷いを振っ切ると、陽の傾きかけた街へと足を踏み出した。

出版社の入ったビルの裏手にあるコインパーキングに愛車を取り入れる。後部席のアシストグリップに吊るされた丈の短いピーコートは自分への褒美にと張り込んだカシミアの高級品だった。昨年の暮れに買ったばかりのそれが埃まみれになるのは願ひ下げだったが、某テレビ局の有名キャスターのように、長いコートを着込んでいては、足場の悪いだろう現地で縦横無尽な取材など出来ようはずがない。クリーニングに出す前で良かった。それなりのレジリエンス（困難適応能力）は体得している由里だった。

「それでは行つてきます」

コットン製のニットに濃いカーキ色のカーゴパンツ、取材用のトッキングシューズで身を固めた由里がデスクの前に立つ。

「おう、頼むぞ。書きあげた記事は片っ端からメール添付で送ってくれ。仙台支社には連絡してある。写真は、満タンになったSDカードから順番に渡せ。念のためWiFiの端末は持ってゆくんだぞ。おっと、ヘルメットもだ」

由里は、壁にぶら下げられた数個のヘルメットに目をやった。現場入りすれば何日も風呂に入らない連中の皮脂にさらされ続けたアレに、自分の髪まで蹂躪されるのはたまらない。

「あれは男性用ですよ、サイズは合うのでしょうか」

「フリーサイズだから問題ないと思うが——奴等が使った後じゃ

あ嫌だつていうんなら資材部へ寄つて行け。新しいのがあはずだ。マスクも忘れるなよ」

確かに、この扱いなら男女に差異さいつをもたせてはいないな。デスクの都合で現われたり消えたりするジェンダーフリーにげんなりとする。目礼をして編集室を後にした。

「すみません、ヘルメットの新しいのをいただけませんか」

「おつ、由里ちゃんじゃないか。どうした、バカどもの雑用まで引き受けることはないぞ。同じ記者なんだからな」

かつては敏腕記者として鳴らした上川幸三が、深く腰掛けたソファから首だけを捻つて由里を見る。男性記者に頼まれて来たのだと誤解したようだ。資材部長との肩書きはあれど、実質、彼一人だけの部屋はタバコの煙が充満していた。

「いいえ、私が東北行きです。被災地の今を女性目線で書いた記事が欲しいんだそうです」

「なんだ、アクティブの方にまわったのか。センチユリーのメス猫共ねこどもが断つたんだな。で、いつものように松山が引き取ったという訳か——お気の毒さま」

「そうだったんですか……」

社標しゃひょうが描かれたビニール包装されたままのヘルメットを受け取りながら、件の女性記者達を思い浮かべる。

由里の勤める光栄社では多くの雑誌が刊行されている。週刊センチユリーがフラッグシップだとすれば、彼女が籍を置く写真週刊誌アクティブは下位に見られることの多い部署だった。事実、こんな時期でさえページの半数が男性読者向けのエロチックなものであったりもしたし、特集の内容にも上品とは言い難いものがある。

センチユリーでのデスク争奪戦に敗れた松山が、他誌が放りだした事案までに手を伸ばそうとするのは返り咲きを目論んでいるからだ。取材ばかり増えて、俺達にはいい迷惑だよと、同室の記者がこぼしていたのを耳にしたことがある。

「ここに潜りっぱなしの俺では話に聞くだけだな、あつちは強烈な匂いと埃らしい。お上品な連中にはお気に召さない取材環境なんだろう」

依頼をより好み出来る立場でないことは自覚していたが、それでもセンチュリーが投げ出したものだと言けば、いい気分はしない。片道五時間程度を見込まれる道中だった。車内に構築される静謐且つ、寛ぎのアタラクシア（平穩空間）で心理的リアクタンスに励むしよう。刺衝の笑みを口の端に刻む。

「気をつけてな」

「ありがとうございます。お土産は何がいいですか？ もっとも、流出した油で何もかもがオイルサーディンになっているかも知れませんが」

「現地で、その手のジョークは禁物だぞ。特に被災者に接する時はな。悲壮感たつぷりの顔にしておくんだ。ルームミラーを見て、練習しておくといい」

由里の入室以来、ずっと張りつかせていた笑顔を仕舞い込み、上川が真顔で言った。

「了解しました」

「もうひとつ、老婆心ながら忠告しておく。俺が阪神淡路を取材に行った時、現地は正に地獄だった。今回は、あれ以上の凄惨さだと聞く。生き抜くために被災者が地獄の住人と化している場合だつてある。高齢者が多い地域なのが救いだが、暗くなつてからは歩くな」

「肝に銘じておきます」

目立った報道こそないが、強奪やレイプも起こっていると聞く。テレビや新聞向けの記事ではないのだろう。或いは、それすら些末な扱いをされるほど、現状は過酷なのだろうか。この数日間、何度も萎えてしまいそうになる取材意欲を奮い立たせたモチベーションは底を尽きかけていた。「失礼します」上川が新しいタバコに火を点けたのをよい頃合いと、資材部を出た。

「周辺道路の通行止めは解除されている。とりあえず石巻まで走って、被害の甚大な三陸沖から宮城市内へ戻るってプランでどうか。五日間じゃあ、そんなところだろう。今は亘理町も原発も入れないけど、あそこは俺達が散々、取材してきた。余裕があれば、陸前高田、女川、松島を回るといい」

先輩記者の石渡にルートを訊ねた時、そんな返事が返ってきたのを思い出し、ナビゲーションの設定をする。

リッター当たり十四キロメートル走ってくれとして、六十リットルタンクの小型RVの航続距離は八百四十キロメートルか、往復九百キロメートルの行程として、取材も車で回るとするとやはり一度は給油する必要があるわね。国見か菅生辺りで休憩を兼ねてサービスエリアに止まろう。由里はナビ画面に映し出された情報を基に、ドライブスケジュールを組み立てる。ETCカードを機器に挿入して、社屋裏のコインパーキングを出ると、首都高速の汐留入口に向かって車を走らせた。

そういえば、今夜から東京タワーに？ GANBARO NIPPON？ と、ライトアップされるはずだ。宝町を過ぎた辺りで思い出した。十八時か——急ぐ旅ではない、都心環状線を一回りして眺めて行こう、心理的リアクタンスその一だわ。江戸橋ジャンクションを大きく左にハンドルを切った。

ツイていない時は、こんなものだ。他県ナンバーの自家用車群が生み出した渋滞に並ぶ人々は、由里と同じ思惑だったのだろう。三宅坂手前から、車を進めることができなくなってしまった。展望台にLED電球で書かれる文字以外、珍しくもなにもない、おのぼりさん向けイベントに、この時期、これほどの人間が集まるものなのか。いや——かくいう私も、そのうちの一人なのだ。自身の選択を呪う気持になった

幽冥を抜けて

由里が東北自動車道に入ったのは午後八時を少し回っていた。到着が早朝では、仙台支社も開いてはいないだろう。給油のついでに仮眠をとって、時間を調整するしよう。

いつ通つても、この街路灯の間隔は広いように思う。道路脇の建造物などからも明るく照らし出される首都高速からの連絡だったせいもあるうが、オレンジのナトリウム光は頼りなく感じられ、取材旅行の行く末を類推するかのよう to 思われ意識のベクトルを逸らす速度を上げれば解消されるのだろうか と試してみるが、今度は視域が狭まる。仕方なく巡航速度を時速百キロメートルに保った。気がつけば、街路灯は、姿を消している。インターチェンジ付近だけの設備なのか……今まで、街路灯など特に気にもしていなかった。いつもは、友人や母が、いつも隣に居ての東北行だったなと回想した。

都内では見かけることの少なくなった？ 支援物資運搬中？ の垂れ幕を掲げた大型トラックや？ 災害派遣？ と書かれた自衛隊のジープやトラックが目につく。洋服や毛布などは、結局、過剰になり自治体が処分することもあるという。今は何が不足し、何を運んでいるのだろう。自衛隊の派遣はいつまで続くのだろう。カーオーディオから流れ出したヴィトルト・ルトスワフスキのピアノに身を委ねると、ふと浮かんだそんな疑問も掻き消されて行った。

平穏を打ち破るのは、ランダムに座席を突き上げる不快感だった。突貫工事で復旧させた高速道路は、本来の舗装ではなかったのだろう。注意して見ると、道路脇に急設の看板があり？ 段差注意？ と書かれている。やれやれ、音楽もゆっくり楽しめないのか。オーディオソースを切り替えると、ラジオ福島が環境放射能測定値を放送している。へえ、こんなことやっていたんだ。震災後、埼玉より北へ

出ていなかったことに気づく。

郡山ジャンクション通過時に確認したカーナビの情報によれば、菅生パーキングエリアまでは七十分ほどの道のりだ、一気に走ってしまえば仮眠も長く取れるなと見込む。マスクにヘルメットの出で立ちではメイクの乗りを気にする必要などなかったのかも知れないが、本社勤務である矜持と、独身女性のたしなみまで打ち捨てるつもりはない。寝惚け眼での支社入りだけは避けたかった。

二十三時半を数分過ぎて、菅生に到着した。売店やレストランの灯りが落ちたパーキングエリアは、寒々とした感に包まれる。少し開けた窓から流れ込む冷気は、都心のそれとは明らかな差異を以て、由里に思考の覚醒を促す。給油所付近に並ぶ車の列は他県ナンバーが目立つ。知り合いの見舞いにせよ支援物資の運搬にせよ、市街地のガソリンスタンドの営業状況が不明瞭な今、ここで最後の給油をしておこうといった思惑は、誰もが同じだったのだろう。

見上げた夜空には、無数の星が散らばる。都心で見える数倍、いや数十倍か、給油待ちの列で数えてみるのだが、車間を詰める度に見印を見失ってしまう。私の人生みたいだな……

大学時代の先輩でもあった恋人が、海外勤務を機にと申し出たプロポーズに応えられなかった一年前の情景が蘇る。あの時、結婚して子供でも産んでいれば、こんな不毛感を味わうことなく過ごせていたのだろうか。

ごく平凡な女の幸せが、自身の求めるものではないように思え選択した結論は正しかったのだろうか。今更か——詮無い逡巡に終止符を打った。

疲労が健全な思考を蝕んでいるようね。給油カードを受け取った由里は、エンジンをかけたまま停車する大型トラックの居ない、静かな駐車スペースを見つけ、シートを倒した。

携帯電話のアラームが、まどろむ由里の五感を無遠慮に揺り起こす。一瞬、自分がどこに居るのか分からなくなっていた。こうした

知覚機能の瞬間的喪失は誰にも起こり得るものなのだろうか。たまゆらに消えるその感覚を味わう毎、抱いてしまう疑問は答えを求めたものではなかった。

液晶画面の表示を確認してから、腕時計に目をやると、数秒遅れで長針が重なる。七時か——軽い朝食と身繕いを済ませて出れば丁度いい時間だな。ドアを開け車外に降り立つと、大きく伸びをした。同様の所作が、駐車スペースのあちこちで見かけられる。付和雷同《ふわらいどう、没個性、凡庸——脳裏に浮かんで消えるその単語達は、由里にとって下し難い自己評価であった。

仙台南部道路長町インターチェンジを下り、カーナビの案内に従って車を走らせる。支社を根城にして、取材を始めよう。長くて五日間か——兄への電話で告げた言葉を想起する。デスクが納得する記事さえ書ければ、その限りではない。岩手まで足を伸ばす前に帰京命令が出るかも知れない。やや腰の引けた感は継続していた。

高速を下りたばかりのメンタル・スピードメーターには修正が必要だった。時速九十キロメートルを指すデジタル表示に、慌ててアクセルを緩める。そうか、地元警察は復旧作業に大わらわのはず。焦ることはなかったんだ、と緊迫した意識に緩和というサプリメントを投与して噛み砕く。

この辺りは大した被害はなかったのだろうか、それとも復旧なった後なのだろうか。各種報道で目にしたようなガレキが積み重なる街の画を予想していた由里の予察は裏切られる。地域によって、差異があるのかも知れない。或いは、車窓を流れるだけの街並みが、異邦人である由里に詳細を送り届けてくれるほどの寛容さを持ち合わせていない、そんなところかも知れなかった。

隠滅のサンクチュアリ

「これが支社ですって……」

六階建ての灰色のビルを見上げる。所々、剥がれ落ちた壁のコンクリートは、震災の影響なのか建物の老朽化のせいなのか判別し辛い。入居社案内には、最上階の一室が光栄社仙台支社と記されていた。小さくても自社ビル——少なくともフロアを打ち抜いたオフィス規模を予想していた由里を落胆の暗幕が覆う。

この建物のフロアを打ち抜きにしたところで、アクティブの編集室程度しかないのだろうな、宿泊設備は機能しているのだろうか。支社を根城にと立てた取材プランが泡沫と消えそうな予感に、溜息が漏れた。

エレベーターには休止中と貼紙があり、六階まで階段を上る羽目となった。若い彼女の体力を以てしても上がり終えた時には肩で息をするほどの運動量だった。数秒を費やして呼吸を整え、？光栄社仙台支社？と、プレートの貼り付けられたドアをノックする。「どうぞー」との声に、重いスチールドアを引き開けた。

「おはようございます。アクティブの仙道です。連絡が入っていると思いますが」

「あ、御苦労さまです。松山デスクから聞いています。僕は支社長の内藤です」

三十代前半ぐらいだろうか、線の細い男が乱雑なオフィスの奥で体を起こした。どうやら、並べた机の上で寝ていたようだ。文言は標準語だが、東北訛りが聞いて取れる。現地採用なのだろう、支社長とくほくなまの肩書が不釣り合いな頼りなさ、被災のショックから立ち直れていないからだろうと、好意的に解釈する。勧められるまま小さな応接セットのソファに腰を下ろした。

「こちらには、おひとりなんですか？」

「派遣で来てもらっていた二人は津波で家を流されてしまいました

てね、家族と一緒に避難所入りしてます。ですから、震災以降、こはずっと私一人です。勿論、私のアパートも人間が住める状況にはありません。本社から、いらした記者さん達の案内と連絡のためだけに、ここで寝泊まりしているようなものですよ。ご覧の通り、壊れた機材の補給もままならない状況でしてね。支社としての機能が残っているのかどうか……」

そう言うと、思い出したように元居た場所へ足を運び、机の上に敷かれたものを丸め始める。シュラフだったようだ。

しかし、震災がなかったとしても、この小さなオフィスは、せいぜい出張所といった体裁であつた。以前、出張した関西支社レベルを期待していた訳ではないが、支社、支社と連呼するデスクに意識操作をされたような気がして、自分の甘さを思い知る。

「ネットは繋がりますか？」

「携帯と私物のラップトップは繋がってますから大丈夫だとは思いますが、ご覧の通り、備品のパソコンは全て破壊されてしまっていますね。未だ、水道もガスも復旧していないこんなオフィスで申し訳なく思います。メール便の集荷は回復してますのでご心配なく」再び向き合つたソファで手渡された名刺に視線を落としたまま、頷いた。

改めて部屋を見回すと、折り重なって倒れていた液晶モニタは全て大きなひび割れが入っている。何故、片づけてないのだろう。来訪者に支社の機能低下を納得させるためだろうか、と意地の悪い推論が顔を覗かせる。それを胸の奥に仕舞い込み、別の言葉を口にした。

「内藤さんのせいじゃないでしょう」

微笑んで、恐縮する内藤の寒心かんじんを軽減させようとしたつもりだったが。愛想笑いの得意でない由里の意図が伝わったかどうかは分からない。彼の表情に変化はなかった。水道もまだなのか——やはり、宿は探さなければいけないのだな。内陸部に入る程にホスピタリティの保たれたホテルも見つけられるのだろうが、それでは移動に費やす時間が増えてしまう。最低限の身だしなみを整えることが出来

る、といった前置詞は伏せて訊ねてみる。

「近くにビジネスホテルはありますか？」

「国道を少し上れば、ガスも水道も復旧したホテルがあります。被災後、すぐにいらした記者さん達は、全員ここで雑魚寝か車中泊でしてね。あの時点で、まともなホテルを見つけるようとすれば相当内陸部まで行かないと無理だったでしょう。皆さん、慣れた様子でしたよ」

例え女性であろうと、格好を構っていい記事など書けっこない。そう言われたような気がして、表情が強張る。愛想笑い同様、表情が豊かでない由里の瑕疵^{かきん}が、それを包み隠してくれたようだった。内藤は、気にせず続ける。

「取材プランを作成しておきました。今更……いえ、今から新事実が見つかるかどうかはともかく、さくさく回ってお帰りになる前に湯沢温泉でも寄って行かれたらどうです。観光方面にも、この震災は大打撃を与えてくれましたからね。湯治客は大歓迎されるはずですよ」

手渡された手書きの取材プランは、出発前に石渡から渡されたものと大差ない。土地勘のない由里が、それに唱^{とな}えるべき異論はなかったが？今更？と？温泉？の二語が勘^{かん}に障った。収穫がなければ、湯沢の風光明媚^{ふうこうめいび}くらい土産にしたらどうか、といった内藤なりの配慮だったのだろうが、一ヶ月も経過してからの取材など物見遊山^{ものみゆざん}みたいなものだろうといった意味にも感じ取れ、退去のドアを閉める腕に、つい力が入ってしまった。

『電気・ガス、復旧しています。エレベーター稼働中』入口ドアに、そんな貼紙のされたビジネスホテルに空き部屋を見つける。どれだけ過酷な取材になると、記事を書くサンクチュアリ（聖域）は確保出来た訳だ。どうしよう……チェックインの午後まで待つて、シャワーを浴びてから出かけようか。でも、空模様も怪しいし、先ずは被災地の空気だけにでも慣れておくべきだろう。小さな逡巡^{しゆんじゆん}を拭^{ぬぐ}い去^さって、愛車へと戻る。

Will (意志)

プラン通り、石巻から始めよう。片手をハンドルから離すと、胸ポケットに入れたICレコーダーのRECボタンを押す。撮影した写真の背景を呼び起こす時、音声は有効な手段となる。

「……ひどい」

東部道路は、その左右で様相を異にする。この道が、津波を防いだのだらう。道路に紛れ込んだ汚泥おでいや漂流物が、その名残なごりを示す。進行方向右手の海側には、変電所内に流れ着いた自動車が放置され、田園地帯には津波に蹂躪された痕が明らかになっていた。海から離れたここがこうなら……沿岸部の荒浜地区に思いを巡らす。ラップトップの画面、グーグルマップに表示された小学校や老人ホームは、どうなっているのだらう。

空港北のインターを下りて確かめたい衝動に駆られるが、石渡や内藤の作った取材プランを蔑ろないがしにする訳にも行かない。帰りに回ればいいわ、と思い留まる。

遠目には被害の少なく見える家並も、多くの屋根にブルーシートが掛けられている。津波だけじゃないんだ。観測史上最大規模であるマグニチュード9.0を記録した大地震は、全ての住民から万遍かまんべんなく平安な暮らしを奪ったのだ。

空気、香り、情緒、どれも実際に足を運ばねば分かるものではない。そんなことは過去の取材で身についていた。大量に流布るぶされる報道写真や映像から、被害の予測はついていたつもりだった。しかし、その由里をして言葉を失わせるだけのものが、そこにはあった。録音中になったままの機器に気づき、手短なコメントを入れると、ホールモードにする。それは表現力に富み、語彙ごいを多く持つ彼女が担当した幾つかの取材において初めてのことだった。「節約よ」そう嘯ささやいてみるのだが、声に力はない。

ガレキや被災した自動車の集積場を眺めながら三陸道へと進む。

すれ違う車両は自衛隊のものであったり、災害復旧車両の横断幕の張られたものであったりと、作業車両が多い。「御苦労さま」心の中で労いの言葉を送った。

丘陵地を抜ける松島手前、ツツジ棚が可憐に咲き誇る。あの山々が津波をしのいでくれたのか——しかし、揺れまでは防げなかったようだ、墓地には倒れた墓石の修復のため、クレーン車が入っている。黒光りする真新しい墓石が鈍く光りを放っていた。

鳴瀬奥松島料金所では、トイレ休憩に立ち寄る車が多く、万が一のためにと、由里も駐車スペースに車を乗り入れ、アルミのボトルに水を詰める。ここの水道は復旧しているのね。少しだけ気が休まるように思えた。

復旧の遅れている地区で、必ず食事をとれる保証はない。空腹だった訳ではないが、カーナビの検索機能でファミレスを見つけると矢本で下り、案内に従って車を走らせる。

街道沿いを並走する線路は千石線か、飴のようにグニヤリと曲がった線路、折れるか傾くかした架線の電柱、復旧の見通しが立たないのも無理はない。初めての災害取材が、時間を置いてからのものだという弛緩した想いは消え去っていた。

復興？ どこが？ 誰にともなく呟く。屋内に侵入した泥を詰めたとされる肥料袋、水の浸いた建具や家具が住宅や店舗前の歩道を占拠する。回収は約束しても、今はまだ手が回らないのだろう。不眠不休で働く自治体の職員は責められない。

定川に並行して走る辺りから車内に異臭が入り込む。「何、これ……ヘドロ？ それとも、死んだ魚の臭いなの」ベンチレータを室内循環に切り替え、助手席のバッグから取り出したハンカチで鼻と口を押さえる。地域の人々には申し訳ないけど、この惨状に相応しい匂いよね。決してそうは書けない事を知りながらICレコーダーに声を収めた。

被害の少なく感じられる街道沿いの白昼だ。車上狙いや窃盗団が姿を現わすこともないだろうとは思うのだが、目の届かない駐車場の車に残す荷物は最小限にしたい。最後まで迷った拳句^{あけく}ビニール袋に包まれたままのヘルメットは後部座席に投げ入れ、ドアハンドルに設置された黒いボタンを押した。ハザードランプのアンサーバックが二度点滅して施錠を知らせる。

^{かんさん}閑散とした店内に足を踏み入れ、アメリカンクラブサンドとドリンクバーを注文すると、ソファに並べたバッグを広げた。平日の昼間だからか、それともママ友のお茶タイムまでは復活していないのか。占拠した四人掛けのテーブルの両隣に客の姿はない。

一眼レフのデジタルカメラ、ICレコーダー、ラップトップパソコンなどを取材用バッグへと移し替える。ボディアーマーと同じ素材で作られたそれは堅牢で軽量。値段は張るが、愛機を守るためにと張り込んだアメリカ製だ。トレーサー・プログラムが気に入って購入を決めたものだった。

ドリンクサーバーの並ぶコーナーへと向かう。いつものように冷たい烏龍茶と温かいカフェラテを、と伸ばした手が止まる。被害が軽微と言われる支社であだったんだ。沿岸部でまともなトイレなんか期待出来っこない、水分は控えておこう。グラスを戻し、湯気の立つマグカップだけを手に取って席に戻る。四切れあったサンドイッチを一切れだけ胃に収めると、残りを紙ナプキンで包んで取材バッグの隙間に押し込む。

さあ、戦闘開始だ。席を立つ由里の表情が引き締まった。

定川に沿って港へと下る。水辺の全てが異臭を放っていた。花粉アレルギーのない由里にとってマスクは閉塞感^{へいそくかん}をもたらすものでしかないが、止むを得ない。いつまでも片手運転している訳には行かなかった。シャッターチャンスは生き物だ、瞬間を逃すな。デスクが口うるさく言っていた文句を思い出した。

速度を落とし、何一つ見逃すまいと目を凝らしながら走る左前方、

映像の記憶があつた。「仮埋葬地だ……」広い平地に規則正しく土が盛られ、隆起の一つ一つに花が供えられている。慌てて車から降りシャッターを切るが、その行為が不謹慎に感じられ、次の瞬間、手を合わせる。有名な動画サイトにアップされたものには、もっと過激なものだつてある。プロである私が怯ひるんでいてどうする。他に記録するものはないかと周囲を見回し、ひび割れたアスファルトをカメラに収めた。ムキになってるのかな？ 自問への明確な答えは、どこからも返つてこない。

港への通路はフェンスで塞がれていた。現地に入つたばかりの私なんだ。内藤さんじゃないけど、サクサクと行こう。とにかく行ける場所を目一杯回るんだ。人々の命を、生活を、そして、もしかすると未来までも奪つた海は、遠く穏やかに蒼さを満たしている。

目にするものの全てが想像を上回る。石巻駅では、コンテナが積み木の様に散乱し、何十トンもありそうな重機が横倒しになっている。製紙工場では、大きなロール紙が転がったままで、起こそうとする人影もない。既に見慣れてしまったガレキや自動車の集積所を横目に女川街道を走らせていると、名物をモチーフにした大きな魚油タンクが横倒しになっていた。そのせいだけでもないのだろうが、多くの海鳥が廃墟となった水産工場地帯を多く飛び回る。信号は機能しておらず、警官が交通整理をしている。車を止めようにも、側溝の蓋は所々開けられたまま。そうでない路肩は鋭利なガレキが散乱している。慎重に停車場場所を探つてカメラを構える。通りすぎる車から送られる視線が刺すように感じられて身をすくめた。その都度どしつかりなさい、プロでしょと、由里は自身に叱咤を繰り返した。視線を振った先、集落が形成されていたらしき一帯のパノラマに由里の感性が凍りつく。見渡す限り累々《るいり》と重なって横たわるガレキの山。建物も電柱も車も船もが、災禍さいかに攪拌かくはんされていた。泥足の巨人が群れを成して走り去つた後のようにも見える。

正に混沌こんとんだつた。迷走を繰り返す政府や経済を、そう擲揄やゆしたこ

とはあつたが、物理的な混沌を目にする機会など、生涯に一度あるかないかだろう。

「ひどい……これほどとは……」ようやく発した言葉が、時を空けてICレコーダーに収まる。

「これで復興に向かつてるって言えるの？」

泣きだしそうな空のグレイ、遠く山裾にポツンと残りそびえる校舎、そしてガレキの山とが陰気なグラデーションを織りなす。

地震発生から一ヶ月、ニュースの鮮度が落ちると、飽きっぽい国民は連続ドラマやバラエティ番組の再開を熱望し、たまに流れる余震のテロップさえ邪魔な存在と感じ始める。そして、来るべき長期休暇の予定に彼等の脳裏は埋め尽くされる頃、そこに被災者への憐憫や哀悼が入り込む余地はない。

惨状ばかり映しては、土気の落ちた経済にも悪影響を及ぼすとはかりに、画面は明るいニュースにとって代わる。新幹線の全線復旧、春の訪れは被災地を通り越し、青森のものだったりもした。国民の記憶が希薄きはくになって当然かも知れない。

「時が止まつてる？」眼前の風景は災禍直後に目にしたもの、何ら変わりなく思える。更に、テレビ画面や雑誌の紙面に収まるサイズでもない。それは由里の視界を覆い尽くし、圧倒し続ける。震える両足を台地に踏ん張ると、あり得ない姿勢で重なりあう車に、ぼつきり折れたコンクリート製の電柱に、そして失われた街の姿に必死にシャッターを切った。

写真じゃ何も伝わらない——我に返って、ファインダーから目を離す。私が撮る程度の写真なんか巷に溢れている。ただ目に見えるだけの現実を枠内に収めて、誰の興味を惹きつけられるのだろう。

『私達ひじれいくがついている。頑張つて、あなたは一人じゃない』聞こえの良い美辞麗句ひじれいくを掲げる一方、再開なったパーク&リゾートには入場待ちの行列が出来たという。ここ以外の多くの街では『人に優しい政治を目指します』と、耳をつんざく音量で街宣車から演説を垂

れ流し、統一地方選の候補者が選挙カーで走り去る。大震災を盛りの過ぎたイベントとしか感じられない人々に、私は何一つ伝えることが出来ないんだ。

無力感と現実の厳しさが胸を縛る。由里の頬に一筋の涙が流れた。

「でも、やらなきゃ」

ラップトップを起動させ、避難所マップを検索する。市役所、学校、運動公園など多くの場所に点在しているようだ。人々の話を聞こう。私に何が出来るとかは分からない。でも、出来ることから始めよう。

明確となった意志が由里の瞳に灯った。

偽りの規律（オーダー）

大きな避難所は先発報道陣の手垢にまみれているだろう。数件を巡って一番小さな学校で車を停めた。

体育館と思しき建物のドアには？テレビ新聞一切取材お断り？の貼り紙がある。どうしよう……これこれこういう理由で取材させてはもらえませんでした、と報告すればデスクの「やはり女は——」といった視線にさらされることは間違いない。私は悪名高いマスコミの記者よ、貼り紙には気づきませんでしたと空とぼけよう。意を決してドアノブに手をかけると中から誰か出てくる気配があった。

「あのう、すみません。週間アクティブの仙道を申します。少し、お話を伺えませんか？」

声をかけた赤銅色の肌をした老人はドアに顎をしゃくってこう言った。

「取材はお断りだと書いてあつぺ」

「少しだけでいいんです。避難所でお困りのことなどありませんか？」

「おめらが来ることがこでらんね」

方言の100パーセントは理解出来なかったが、歓迎されていないことは老人の表情からも明らかだった。他に話を聞ける誰かはいないものか、閉じられていないドアの奥を由里は覗き込む。

「勝手に入ったりするごつて警察呼ぶかな。都会もんはずるこくてしゃあねえ」

老人は由里が諦めて立ち去るのを確認するまで、てこでも動かないといった顔で腰に手を当てたまま仁王立ちとなっている。「失礼しました」そう言つて踵きびすを返すと、こんな弱腰じゃあダメだわ——小さく息を吐いた。

他を当たってみよう。車に戻ろうと足を踏み出した時、校庭の隅で遊ぶ二人の子供が目に入った。生徒なのか避難所に住む子供なの

かも分からないまま、速足で歩み寄って声を掛ける。

「ねえ、あなた達、ここで暮らしているの？」

警戒心を瞳に宿したまま男の子が答える。

「テレビの人？」

「ううん、あたしは本の人。ねえ、ここに住んでるの？　いつから？」

「津波の日からずっとだよ。あたし達、本に載る？」

もう一人の女の子が、男の子を押しつけるようにして身を乗り出す。

「そうよ、お話を聞かせてくれるなら――」

ちゃんと書くわ、でも載るかどうかはデスク次第ね。内心で補足する由里に咎めるような声が届く。

「ちよつと、あんた。うちの子に何か用？」

ジャージ姿の女性が、ずらりと立ち並んだ仮設トイレの影から姿を現した。母親だろうか。腐敗抑制剤のキツイ香りが鼻をつく。

「あ、失礼しました。私はこういう者です。お母様ですか？　お子さんにお話を伺えればと――」

由里が渡した名刺から顔を上げず、刺を含んだ声で女性は言った。
「アクティブ？　ああ、あのエッチな本か。へえ、あんたみたいな記者も居るんだ」

やはり、その程度の認識なのか。表情を曇らす由里に構わず女性は言葉を続けた。

「どうせ、あんたもきれいごとしか書かないんでしょう。まあ、本を買うつもりもないんだけどさ」

「ご迷惑はお掛けしません。少しでもお話を伺えませんか。さつき、外に出ていらした方に取材はお断りだと聞いたのですが、私も手ぶらでは帰れません」

落ち込んでる暇などない。精一杯の悲壮感を浮かべ泣きついてみた。

「お金は出るの？」

「え？ あ……はい」

予想だにしない要求に言葉が途切れそうになるが、財布に入れた紙幣の枚数を思い出して言葉を繋ぐ。

「薄謝ではありますが」

「冗談よ。こんなところでひと月も暮らしていると、人も悪くなっちゃうみたいね。で、何が訊きたいの？」

ふっと、小さな笑いをこぼす。化粧つきの顔は、小さな子供を持つ母親にしては老けてみえる。避難所暮らしの苦勞がそうさせているのだろうか。

「被災された時の状況や、こちらでの生活の御不満をお伺い出来る」と有難いのですが」

「御不満ねえ」ふっと、皮肉めいた笑みを浮かべ女性が話した。「ひどいもんよ、今でこそ食べ物も洋服も全員に行き渡るようになったけど、最初は一日に食パン一枚、おにぎり一個の食事よ。勿論、風呂もトイレも使えない。暖房もないのに雪は降る。着の身着のまま、ここへ逃げ込んだのはいいけど、毛布もなければ、着替えもない。床に敷く段ボールさえなかったのよ。都会に住むあんた達が温かいお風呂に入って、湯気の立つ食事を楽しんでいる間、ひもじさと寒さに耐えている私達が居るなんて思ってもみなかったでしょうね。」

「いえ、被災地の状況は報道で――」

「じゃあ、僅かばかりの食糧を奪い合う人々を見た？ 命が助かってても骨折や捻挫の痛みで一晩中、うんうん唸ってる人はテレビに映った？ お医者さんも居なきや薬もない、そんな中で苦しむ人が居ると思わなかった訳？」

女性の語気が鋭くなった。確かに地震や津波を逃れたからといって、怪我一つなく避難出来た人の方が少なかったのだろう。死者と行方不明者の数は頻繁に報道されていたが、負傷者といった項目はなかったように思う。

「そんな人達には気の毒だけどね、こっちだって寒さと空腹で眠

れないんだ。早く、病院にでもどこへでも行ってくれないかと思ったりもしたもののよ。ただでさえ年寄りばかりなのよ。辛気臭いったらありやしない」

「お気持ちは分かります」

「分かるですって？ 旦那もお姑さんも行方不明、パート先は津波に流されて仕事もなくなつた。私とこの子達には何も残つてない。仮設住宅だっていつ入れるのか分からない。例え入れたとしても光熱費は被災者負担だっていうじゃない。どうやって払えっていうの？ 二年で追い出されたその後はどうしろっていうの？ 支援物資だって、いつまでも届くものじゃないのよ。あんたに何が分るっていうの」

軽い相槌のつもりで口にした言葉に、女性の目が吊りあがつた。激しくなる口調に由里は失態を悔やんだ。

「やっと、テレビも見られるようになった。芸能人や政府のえらい人達も来てるみたいね。ここじゃあ、見ないけど——私達はエキストラか何か？ 勇気を与えたい？ 胸が痛む？ 正直、あんた等何様のつもりって感じだわ。立場が逆転して、同様の言葉を掛けられたらどう感じる？ ほんの数分で今まで築き上げてきたものを全て失くしたのよ。経験してみなきゃ、絶対に私達の気持なんか分かりやしないんだ。がんばれがんばれも、もう聞きたくない。目一杯頑張ってるんだ。泣かないように、狂わないように、死んでしまおうとしないようにね」

彼女の苦悩が、由里の心に深く突き刺さる。

「食べ物も寄付もありがたいと思うわ。でもね、私達は物乞いじゃないの。喜んで施しを受けているなんて思わないで欲しい。地震や津波が来るまでは、あんた達とそう変わらない生活だって出来てたんだ。テレビに映るのは、ありがとう、嬉しいって素直に口に出来る人だけ。複雑な表情で支援物資を受け取る私達じゃあ画になら^えないからでしょうね。でも、この辺りはまだマシ。気仙沼の友達に聞いたんだけど、あっちじゃ震災直後、道端でカップ麺を五百円

で売ってたりしたそうだし、ガソリンは一リットル千円になってたそうよ。放火もレイプも略奪も何でもあり。いつだったか、携帯で見たニュースに、震災があっても規律正しい生活を送る日本人に海外では感心しているってのがあったわ。知らないってことは、幸せよね、おめでたいと言った方が正しいのかしら」

吐き捨てるように言った女性の表情が突然、和らいだ。

「ごめん、あんたにボヤいたって始まらないわよね」

「いえ、私が軽率でした」

頷くだけになってしまった由里は、自分かもしかしてならなかった。

「ママ、怖いよお」

近づいてきた男の子が母親の袖を掴んで引く。子供達に向ける女性の顔は、母親のそれへと戻っていた。

「ごめん、ごめん。マコトに怒ってる訳じゃないからね」

「雨が降ってきたよ、中に入るう」

「あ、本当だ。ねえ、もういい？」

「ええ、ありがとうございます。記事になりましたら送らせていただきます。お名前は？」

伝える声^{かす}が擦れる。これが被災地の現実なんだ——その重さに由里は打ち拉^{ひし}がれていた。

「古田千鶴、住所は当分ここよ。当てにしないで待ってるわ。じゃあね」

親子は手を取り合って、体育館の入り口へ向かう。

「パパ、明日には帰ってくるかなあ」

マコトと呼ばれていた男の子が無邪気な声で母親に問いかけた。

父親の不明を知らされてはいないのだろう。

「うん、私達が頑張ればね」

「じゃあ、がんばるっちゃ」

「そうそう、がんばるっちゃね」

親子連れの姿がドアの向こうに消えるまで見送る。振り返って手

を振った女の子に、慌てて手を振り返す由里の表情は硬い。小さな揺れは一時間と間隔を空けず、震える膝を揺らす。こんな状況下でさえ、あの人は強く生きようとしているのだ。書こう、書いて善意の押し売りを止めさせないといけない。被災者にかける言葉の無神経さに気づいてもらわねばならない。使命感、その三文字が胸に浮かび上がる。決意を秘めて乗り込む車のフロントガラスを小さな雨粒が流れる。被災地が流す涙のように思えた。

女性の話を頭の中で反芻しながら、街道を登る。迷彩服や消防の制服に混じって、ガレキを掘り返す人々や、廃屋——つい、一ヶ月前までは主のあったその中に入り、倒れた家具や畳みを持ち上げている人々が居た。まだ、行方不明の家族を探しているのだろうか。それとも思い出の品を探すために仮の住まいから足を運んでいるのか。話を聞いてみるべきだ。そう思うのだが、つい臆おくしてしまう自分が居る。迷いを持って望んだ取材は、僅かな衝撃に打ちのめされ、萎えそうになった心は自己防衛本能の中に逃げ込もうとしていた。今はこれ以上厳しい現実を知りたくない。明日こそ頑張るからと、自分に言い聞かせ、取材対象を命を持たないものに切り替えた。

ここにも誰かの生活があったのだろう。車を止め、バッグから皮製のカメラマングローブを取りだすと、数少なくな残った建物の一つに足を踏み入れ慎重に足を進める。水に浸かった木材や壁は異臭を放ち、脆く崩れやすい。体を支えようと手を伸ばした柱が手応えを失って倒れ込むと、由里は大きくバランスを崩した。蓋を閉め忘れた取材バッグの中身が散乱する。腰を屈めて、散らばったものを拾い集める背後で声がして、由里はピクリと肩を震わせた。

「おねえさん、危ないよ。余震が来ると、こういう壊れかけた家は簡単に崩れ落ちちゃうから」

振り返ると二人組の青年がニヤニヤ笑いを浮かべ、こちらを見ている。どちらも髪を金色に染めている。

「ねえ、何探してたの？ 俺達も手伝ってあげようか」

車のナンバープレートを見たのか、標準語で話してくるのだが、独特なイントネーションまでは隠せない。

「いえ、探し物ではないんです。それに、もう行きますから」

「だめだよ、勝手に人の家に入っちゃあ」

「そうですね、うつかりしてました。雑誌社の者です。ごめんなさい。ここは、あなた方のおうちなんですか？」

「そうじゃないけど、ほら、こんな状態だから物騒でさ。俺達は自警団みたいなもんだよ。泥棒が来ないように見回ってるんだ」

「そうなんですか。今後は変な疑いをもたれないよう、気をつけます」

二人の金髪青年が、後を追って声をかけ続ける。

「どこの雑誌？ 俺達も何度か話を聞かれたんだけど」

「そうでしたか」

カメラを構え、室内を数枚撮影すると、再び慎重に足を運んで建物から出た。

車の荷室にバッグを置き、ラップトップを開いてみる。ダメージはなさそうに見えるが、機能までは分らない。電源ボタンを押そうとして、ここで故障が判明したところでどうなる、と行為の無意味さに気づいてディスプレイを閉じる。慣れたキーピッチの愛機だったが、壊れていれば内藤のを借りるしかない。いざとなれば、家電量販店を探して同じ物を探せばいい。気持を切り替え、それぞれの機材があるべき場所へと詰め直した。

「取材しないの？ 被災者の声とかなんとかをさ」

ナンパでもしたいの？ お生憎様、こっちは忙しいのよ。浮かんだ言葉を呑みこんで努めて事務的に返す。

「今日は先を急ぎますので、また次回にでも」

「次っていつさ？」

会釈をして、さっさと運転席に乗り込む由里に、粘りつくような視線を張りつかせたままの男達は言葉を止めない。聞こえないフリをしてエンジンを始動させると、諦めたのか前方に停められた軽ト

ラックに戻って行く。遠ざかる背中に描かれた髑髏らしきプリントを目の端で追った。

変な奴等、何が自警団よ。あんた達こそ、火事場泥棒みたいなこととしているんじゃないの。悪趣味なダウンジャケットだこと。心の中で投げ掛ける悪態に嫌悪感が滲^{にじ}む。ポツポツとフロントガラスを叩いていた雨粒が次第に大きくなり、バチバチと大きな音を立て始めた。今日はここまでね——ホテルで一息入れるとしよう。エディタソフトの動作が不安定だったことを思い出し、助手席に置いたバッグにそつと手を置いた。

LOST

特定のブランドに拘りがあった訳ではない。ただ、チェックアウトに並ぶフロントクロークで、誰もが同じ香りを漂わすことには抵抗を感じる。それがホテルのアメニティを使わない理由だった。コスメショップでもらうサンプルは、いつも出張用にととってあった。狭いバスタブではあったが、冷えた身体が温もりを取り戻すと、身も心も新品になったような気分になれる。全身に染みついていたかと思われた異臭は、ボディソープの香りにとって代わる。アメニティのネットに小さな固形石鹸^{かっさい}を入れ、即席の愛車用フレグランスを作ると、その閃きに小さく喝采^{かっさい}を贈った。

温度差だけではない。人、街、空気のどれもが由里の住む都心とは違う異国に迷い込んだ感覚があった。あの時はこんな気持にはならなかったのに……今は海の向こうで暮らす恋人と訪れた記憶を辿る。

歓迎されて当然の観光客と、どちらかと言えば来訪を迷惑がられるマスコミに身を置く今、比較すること自体が乱暴な行為だった。

書こう——現在に意識を引き戻して、ラップトップを開くとエディタを立ち上げる。カメラから抜き出したメディアをスロットに入れると小さな記憶媒体に収められた画像が表示される。問題ないみたいね——落下させたパソコンへの不安は解消されたが、見慣れた機材の列に不足因子があった。

え……どこ？ コート、カーゴパンツのそれぞれのポケット、取材バッグも隅々まで探るが目当てのものは見つからない。被災地の状況、写真の背景描写、避難所の女性のインタビューを収めたはずのICレコーダーが見当たらなかった。

足を踏み入れた、石巻の廃屋で、バッグの中身を散乱させたことを思い出す。あの時……落下させたパソコンにはかり気を取られ、帰路の車内でもICレコーダーの所在を確認することはなかった。も

う、バカなんだからっ。つい数分前に贈った喝采は、この失態が帳消しにした。

東部道路から見えた家電量販店に看板の灯は入っていた。現在ではポピュラーになったＩＣレコーダーだ、機種に拘らなければ入手出来る。明日以降は、それを使えばいい。今日の記憶なんだ、書けないはずはない。キーボードに手を置くが、指は音楽を待つ踊り子のように動きを止めたままだった。

冗談でしょ、老人じゃあるまいし——苛立ちの中、再び記憶の断片を拾い集めようとする。被災地の惨状に衝撃を受け、女性の話に使命感を感じたのは何に、どんな言葉にインスパイアされたんだっけ？

状況を思い浮かべよう。そうすれば記憶はそれに導かれるはず。しかし、頭に浮かぶものは恋人との別れの場面であったり、兄との諍^{いさか}いだったり、キーボードに置かれた指はダンスの開演を拒否する。デジタル機器の利便性に頼り過ぎていた自分が情けなく思えた。

お風呂も済ませて、メイクも落としちゃったのよ。お願い、働いて私の頭と指。懇願はパペッツの回路（ ）を素通りして行く。余震に備え、ホテル備え付けの浴衣ではなく、取材用の活動的な衣装に身を包んだ姿が鏡に映り、語りかけてきた。

「記事になったら送るって言ったわよね？ あ的女性の名前を覚えてる？ 住所はどう？」

「わかったわよ、行けばいいんでしょう、行けば」

鏡の中、融通の利かないもう一人の自分の説得に屈する。コートのポケットに免許証と小銭入れを突っ込むと、溜息と共にRAV4のスマートキーを握りしめた。

もしかしたら、車の中に落としているかも知れない。その期待もなくはなかった。エレベーターを待つ時間が長く感じられる。小さな子供が、呼び戻しボタンを連打する気持が理解出来た。

一枚ずつRAV4のドアを開いては、隅々まで丁寧にライトで照らす。

……ない……もしかして——最後に祈るような気持ちで荷室のドアを開く。

儚い期待は水泡と帰した。

「いいわ、どうせ真っ暗なんだし眉毛が半分なくなっただって誰も見やしないんだから。さっで行って、さっさと拾って帰る。これで見つからなかったら、諦めてよね」

ルームミラーに映るもう一人の由里が、静かに目を閉じ、大きな動作で満足げに頷いたように見えた。

土地勘とちかんがない上、目印になる建物もない。『●●のある交差点を右です』カーナビの案内音声に「だから、なくなってるんだってば」と何度、突っ込みをいれたことだろう。地点登録をしていなければ辿り着けなかったに違いない。

街路灯は全てなぎ倒され、数えるほど残る建物にも灯りはない。そもそも電気を運ぶ電柱すら目にしなかったのだ。漆黒じくくろと静寂せいじやくが支配する廢墟はいきよに、海鳥うみどりの鳴く声だけが遠く響き渡っていた。

訪れた時に車を停めた辺りの数メートル手前に小型RVを停車させ、ヘッドライトを頼りに周辺を探る。しかし、シャンパンゴールドのICレコーダーは見つからない。やはり中かな——全部拾い集めたと思ったんだけどな……LEDライトで足元を照らしながらゆつくりと歩を進める。釘でも踏み抜いたら大変だ。避難所で破傷風はしょうふうが流行しているというニュースを聞いていた。先進国であるこの日本で、今時破傷風か……この地方の実情を物語っているようだ。編集室で耳にした時には他人事のように感じられたそれが、今や身近な脅きよ威いとなっていた。

破壊され、ガラスのなくなったサッシの枠にグローブをした手を掛け、ライトを持つ手を挿し入れる。物陰から伸びた何かが由里の腕を掴つかむと、あっという間に廃屋内に引きずりこまれた。数本の腕が、体の自由を奪って床に引き倒す。

「次回が、こんなに早く来るとは思ってたべ」

聞き覚えのあるイントネーションが暗闇から起こる。あの時の――
声を上げようとした瞬間、口を塞がれ、頭部を床に押しつけられた。
強烈な匂いと恐怖に吐き気がこみ上げる。こんなところで、こんな
奴等に……押さえ込まれた両手を引き剥がそうとするのだが微動だ
にしない。何人居るの？ 腰に押し掛かった男を膝で蹴り上げよう
とするのだが、ストロークも力も足りない。

「おとなしくしろって、ねえちゃん。命までとろってんじゃない、
ちよいと楽しませてもらえばいい話だ。何もヴァージンって訳でも
ねえべ？」

下卑た声、野卑な笑いが方々から聞こえた。異臭たちこめる廃屋
の中、上川資材部長の忠告が脳裏に蘇る。『暗くなつてからは出歩
くな』

「暴れるんじゃねえよ、分かってねえな。ここでぶつ殺しちまつて
もいいんだぜ。まだまだ死体がゴロゴロ転がってるんだ。ひとつや
ふたつ増えたところで誰も怪しみやあしない。このご時世だ、検視
もしないってんだから、俺達はやりたい放題って訳よ」

脅しなのか、本気なのか分からないが、その恫喝に気持ちが悪くじ
けそうになる。本気で抗えばレイプなんて出来っこない。そう信じ
ていた由里だったが、恐怖に委縮した四肢が意思の支配下を逃れよ
うとする。

ようやく暗闇に目が慣れてきた。腰辺りに押し掛かった金髪が、
ファアの付いたダウンジャケットを忙しなく脱ぎ捨て、由里のコ
ーに手を掛けると荒々しくたくし上げた

海馬・脳弓・乳頭体・視床・帯状回・海馬を結ぶ回路をパペッ
ツの回路と呼び、脳内で記憶を司る部位と考えられているそうです

Malice in the Raven（漆黒に潜む悪意）

「パンパカパン」腐臭が染み付いた布切れで由里の頭部を押さえていた、もう一人の金髪が、頭上で無情なファンファーレを口ずさむ。カーゴパンツのドローコードに男の手がかかった。涙で視界がぼやける。嘔吐感おうとかんのせいよ、こんなことで泣いてたまるもんですか。連続暴行魔の取材にあたった時、サディスティックな嗜好を持つ者に、被害者の涙は絶妙のエッセンスになる、と犯罪心理学者が言っていたのを思い出した。私はまた、選択を誤ったの？ 思考の焦点を変え、体に取り戻そうとする。

廃屋に車のエンジン音が近づいてくるようだ。再び声を上げようとするが、押しつけられた布切れが猿轡さるくつわのようになって呻き声さえミュートされてしまう。

周囲がぱつと明るくなった。眩まぶしそうに光源に顔を向けた男の近くで、ボコンと音がして腹部の圧迫が消える。押し掛かっていた男が転げ落ちた。

「ストトライク、バッターアウトオ」

胸間声むまこえが光源の向こうから上がる。転がった男がこめかみを押さえながら、のろのろと立ち上がった。何が起きたのだろう。下半身の自由は取り戻したが、依然、頭と腕は床に押しつけられたまま、懸命に視線を振ろうとした瞬間、シュツと風を切る音がして、再びボコツという音が響く。今度は、頭を押さえつけていた男が、もんどりうって倒れた。すかさず上体を起こす。両腕りょうがの拘束もなくなっていた。エネルギーを使い果たし、力なく転ころがる白い球体が音の発生源だったようだ。野球のボール？ 置かれた状況との違和感で、その正体が受容うけようし難い。

「助けてっ」

解放された声帯を通る声はかすれる。由里が意図したほどの音量にはなっていなかっただろう。

「ツアウトー」

「誰だっ」

怒声^{どせい}を放って男達が光源に向き直る。四人組だった。そして、近づいてくる人影は二つ。逆光で人相^{にんそう}風体^{ふうたい}までは確認出来ない。

「正義の味方に決まってるじゃねえか。大^{だい}の男が、よってたかつて一人の女をレイプしようたあ、男の風上にも置けねえ。お天道^{てんとうさま}様が許しても俺達が許さねえんだよ」

時代劇でしか聞けないような台詞だったが、どうやら助けには違いなさそうだ。体の自由を取り戻した由里は壁に背中がつくまで後ずさって様子を見守る。光芒^{こうぼう}の中にヘルメットを被ったツナギ姿の男達が現れた。伸び放題のヒゲをたくわえた声の主は、避難所で見かけた人々と変わらない風体だが、何故だか満面の笑みを浮かべている。もう一人は……客観を文章にするのが職業の由里でさえ、咄^と嗟^さには特徴を見いだせない——それほど平凡な外見の男だった。その表情には何の感情も宿していないように見える。赤い手袋の甲部分、反射材がキラキラと輝きを放った。

「こつちは四人だぜ、たった二人で何が出来ると思ってやがる」
数的有利^{すうてきゆうり}を主張する金髪男だったが、ヒゲ男の笑みは消えない。

「数にモノ言わすには、倍じゃあ足りねえな。じゃじゃーん、これなあんだ？」

ヒゲ男が光芒からシルエットをずらし右手に携^{たずさ}えていた棒状の物体を差し出す。依然、緊張感の欠片^{かけら}も感じさせない口調だった。

声の主が差しだす物に目を凝らそうと、もう一人の金髪が足を踏み出した瞬間、それがさつと反転し、暴漢^{ぼうかん}の横面^{ひょうめん}を鈍い音を立て打ちすえた。金髪は呻き声一つ上げず昏倒^{こんとう}した。杖？ 由里の目には、そうとしか映らなかった。

「バカが見るうブタのケツー。ほれ、三人になっちまったぞ」

状況を考えれば、二人の男は救いの神のはずだったのだが、登場からこの瞬間までの状況に似つかわしくない発言の数々に、由里の恐怖は去らない。無表情男の方は、ただの一言も発していなかった。

「やりやがったな」と叫んで長髪の男が尻ポケットから何かを取り出す。キラキラと光を反射させるそれは刃物のように見えた。

「あ、ナイフなんか持ってやがるのか卑怯者め。だったら、軟球じゃなく硬球にしとくんだったな」

「何、訳の分からないことを言ってるやがる」

声を荒げて、威嚇する暴漢達の狭間を影がすり抜けた。くぐもつたような音と、うつと唸る声^{うなりこゑ}が交錯する。由里は壁に預けた体重を両足に戻し、状況を把握しようと身を乗り出す。次の瞬間、四人の暴漢は床に這いつくばっていた。とりあえずの安堵感と諸々の感覚が戻り、震える足が体重を支えきれなくなる。由里はその場にしゃがみ込んだ。ヒゲ男が変わらぬ調子で由里に言った。

「大丈夫か、お嬢ちゃん。こんな真つ暗がり^{くらやみ}を女一人で出歩くじゃねえよ。レイプして下さいって、言ってるようなもんだぜ」

「事情があつて……」

震える声だった。通じただろうか——由里の疑問はヒゲ男の返事が取り除ける。

「どんな事情があろうとも、だ。聞いてねえのか？ 震災で服役中の犯罪者まで釈放しちゃってるんだぜ、ここいらは」

そうだった——外国人強盗団や頻発するレイプの話は、避難所の女性から聞いたばかりだった。

「で、あなた方は？」

「あれ？ 聞いてなかったのか？ 登場シーンで言つたる正義の味方だ、って。ほれこうすれば、まんま怪傑ハリマオだろっ」

そう言つと、後ろポケットからタオルらしき布切れを取り出しヘルメットを脱ぎ捨てた顔に巻きつける。この瞬間まで一言も発することのなかったもう一人が、笑いを含んだ声で指摘した。

「小野木さん、若い女性に怪傑ハリマオは分らないと思いますよ」

「ちえっ、そうか。東北くん^でだりまで出張^でって、自警団の真似ごとまでするつもり^でなんかなかったからな。こうなると分かつてりや、

ウルトラマンのお面でも持ってこればよかったぜ」

ヒゲ男は、残念そうな顔になった。

この二人は信頼出来る人間なのだろうか——取り憑かれた恐怖からは解放されつつあったが、本来の冷静な思考は戻っていない。話すんだ、話して彼等の正体を見極めよう。ヒゲ男はオノギというのだな——声が震えないよう注意して由里は続けた。

「とにかく、ありがとうございました。それは？」

ヒゲ男が手にした長い棒を指差す。

「これか？ 拾ったんだ。薙刀だ。刃は模造だから装飾品なんだろうな」

楽しそうに、手にした薙刀を掲げる。

「拾得物横領ですよ」

「固いこというなよ、自治体でさえ被災した車からガソリンを抜くことを許可したんだぜ。言うなれば超法規的措置^{ちようほうきてきそち}つてヤツさ」

「超法規的措置は、個人には適用されません」

ヒゲ男はおもしろくなさそうな顔になり小声でボヤク。「助けてやったのに、可愛げのねえ小娘だ」そう言ったように聞こえた。

「まあいい、送ってやろう。どこの避難所だ？ 怖がるこたあないぞ。俺には可愛い嫁さんとガキが居るし、こっちのカジさんにも見たことないけどキレイな嫁さんがいる……らしい。安心だろ？」

小野木と呼ばれた男の顔はススと埃、そして顔の三分の一を覆うヒゲで年齢が判断しにくい、明らかに中年といえそうな風体をしている。男というものは恋愛感情抜きでも女性を抱けるものだと思っている。風俗産業が成立しているのがいい例だ。そんな事を言われても安心などできるものか、と由里は思った。本来の思考が戻ってきているようだ。

「いえ、私は雑誌記者でして——」

「そうか、取材クルーとはぐれちゃったって訳か。探してやるよ」
今度は、無線機らしき物を胸ポケットから取り出す。慌てて手を挙げて制した。話を最後まで聞こうとしない人だな。暴漢とのやり

取りといい、かなり独善的な人間なのだろうと推察する。

「違うんです。私は最初から一人でここに――それに車がすぐそこに置いてありますので送っていただく要はありません」

「外のRVか？　タイヤが四本共パンクさせられてるぞ」

「え……」

「うまく、こいつ等の手をかいくぐって車に辿りついてても、そこから逃げられねえようにって企みだと思う。手慣れてやがる、きつと常習犯だな。ま、お嬢ちゃんが無事だったのが何よりだ」

爪先から頭までを不遠慮な視線で眺めまわす。由里は反射的に胸の前で手を交差させた。

「はい、お陰さまで何ともありません。でも、そのお嬢ちゃんは止めてもらえませんか」

「おっと、気を悪くさせたならごめん。まあこんな状況だ、セクハラだって訴えるのだけは勘弁してくれよな。見た所、せいぜい二十代半ばってとこだろう？　俺んとこの下の娘がそのぐらいでな」
そう言うとお小野木は照れ臭そうに笑った。私と同年輩の娘？　ついさっき？　ガキ？　と言わなかっただろうか？　まあ、そんなことはどうでもいい。ここへ来た目的を思い出し、由里は周囲を見回す。

「探し物はこれかな」

音も立てずに由里の隣に立った無表情男が、シャンパンゴールドの筐体を差し出す。驚いてヒツと声を上げそうになる。

「そうです――やはりここで落としていたんだ」

「いや、そいつのポケットに入っていた。探し物にくる女性を待ち伏せてレイプする連中が居ると聞いていた。どうやら、こいつ等がそうらしい」

抑揚よくようを感じさせない声でそう告げると、だらしなく体を弛緩ゆるさせたままの金髪男を指差す。

「ボイスレコーダーか？　それ。仕事熱心なもの結構だが、命あつてのものだねだからな。今後、夜の歩きは禁止。そうそう上手いこと俺達みたいなのが通りかかるとは限らねえぞ」

まだ、あなた方を信用した訳ではない。由里は内心で反論を唱^{とな}える。

暴漢の一人が目を覚ます気配がして、オノギがもう一人に目配せを送る。光芒を避けた暗闇の中、ゴンと音がして、体を起しかけた男が再び倒れ込む様子が感じ取れた。

「尚が到着するまでには、まだ時間がある。もうちょい寝ててもらおう。また、起きると面倒くさいな。縛っておくか」

そう呟くと、背負っていたリュックから細長いものを取り出し、気を失っている四人の手足を手際良く縛りあげて行く。結束バンドだったようだ。他にも仲間が居るのだろうか？ その疑問を口にした。

「ナオって誰なんですか？」

「自衛官だよ、ここいらで復旧作業にあたってる。こいつ等を引き渡すつもりで呼んだんだ。寒い中、悪いが、後少し待っててくれ」

「分かりました——車がダメならどうせ身動きできませんし」

二人の言葉は、この地方のものではなくイントネーションを隠しているようでもない。一体、何者なのだろう？ 本当の自警団なんだろうか？ 正体を探ってやろうと口を開きかけた時、外でブレーキの軋^{きし}み音^{おん}がして声が上がった。

Collaborators (協力者)

「勘弁してくれよ、また強盗かレイプ犯だろ？」

光芒の中に、迷彩服に身を包んだ自衛官が姿を覗かせた。小野木達の風体から、同年輩の自衛官が来るものとの予想に反し、声の感じも身のこなしも若そうだった。すると、この二人も自衛官なのか——それならば納得出来る。土地の匂いを感じさせない物言い、若い自衛官を呼びつける振舞い。現役でなければ元自衛官なのだろう。いずれ確かめよう。習慣になっていたICレコーダーのボタンを押しかけて思い直す。こんなのにばかり頼ってちゃいけない。もう一度パペットの回路に火を入れよう、と筐体をコートのポケットに落としこんだ。

「いいじゃねえか。義を見てせざるは勇なきなりって、言うだろ。あ、雄つて言えば……昔、お前も雄一郎に助けられたことがあったじゃねえか」

「古いこと、覚えてやがるんだな」

若い自衛官が苦々しい表情になる。無帽だった彼の顔は整っている。誰かに似てる……その横顔が記憶の断片に引つかかる。

「だいたい、嫁さんも子供もほったらかして、こんなとこまで出張つて来るんじゃねえよ。カジさんまで連れてきちゃって——農園は大丈夫なのか？」

「おうよ、新しい乗組員だつて居るし、誠が戻って面倒見てくれるから安心だ。美代ちゃんも、最初はぶつくさ言ったけど、言い出したら聞かねえ俺だしな。それにたまには息抜きもしねえと、また浮気癖が——おっと、これはオフレコだぞ」

乗組員？ 漁師なの？ でも農園って行っただわよね……小野木と自衛官が交わす会話が由里に混乱を招く。しかし、無表情男がカジと呼ばれていることは分かった。

「で、警察が引き取りにくるまでは、駐屯地ちゅんとんちでとつかまえとけ

つていうんだろう？ 官舎かんしゃだって被災してるんだぜ、俺達の寢床がなくなっちまうってえの。もう二十人ぐらいになるぜ。警察だって容疑者を収容する施設には困ってるんだからさ」

「容疑者じゃねえよ、レイプ未遂みすい、器物損壊きぶつそんかいの現行犯逮捕だ。何なら、ここで殺して埋めちまうか」

物騒な文句をさらつと口にする。

「だめだってば、仮埋葬墓地だってもういっぱいなんだから。それに俺達が捕まえたことしてるからいいけど、ジュンさのやってることは違法行為だぞ」

巡査？ 警察官なのだろうか。自衛官の言葉が、由里に新たな混乱を呼んだ。考えてみれば、親子ほども年齢の離れて見える小野木と自衛官の会話が規律の厳しい上官と部下のものとは思えない。それどころか旧知の仲さえ感じさせる内容でもあった。

「んにゃ、我が国でも市民による逮捕は認められている。警官に突き出さす代わりにお前に引き渡してるのは違法かも知れんがな。まっ、固いこと言うなよ。元不良少年」

論旨をずらした反論は砂の柱に立つ城のように脆いもろ。

「現役不良中年にいわれたかないね。警察の機能が戻ったらヤバイぜ」

うーん、と小野木が考え込む表情になった。

「さすがに、こんなところで警察に捕まってちゃあ美代ちゃんも怒るだろうな。じゃあ、海に沈めてこよう。津波で掘り起こされちまった道路標識がたくさんあったろう。あれに縛つとけばそう簡単に浮き上がっちゃこねえだろう」

再び、物騒な提案を口にする。しかも、自分の閃きひらいめを讃たたえるかのようしょうように掌を拳で叩いている。そのやり取りを、目を覚ました暴漢の一人が聞いて抗議の声を上げた。

「冗談じゃない、レイプぐらいで殺されてたまるか。裁判を受けさせてくれよ」

「ぐらいだと？ される方の身になってみる、女性にとって耐え

がたい屈辱なんだぞ。死にも勝る苦しみを感じる人だつて居ようさ。ここいらには、まだまだ仏さんがゴロゴロ転がってる。ひとつやふたつ増えたところで誰も怪しみやしねえんだよ。お医者さんも多忙で検視なんかやってる暇はない。なんせ、病理医まで避難所に動員してるぐらいだからな。こいつが引き取ってくれねえんじゃあ、海に沈めるしかないじゃねえか。恨むならナオを恨め」

「あはは、俺かよ」

とんだとばつちりに、さぞや迷惑がるかと思つた若い自衛官は愉快そうに笑う。そして小野木の言葉は暴漢の台詞せりふを復唱するかのようだった。

「ナオって誰なんだよ。勘弁してくれよ、何でもするから」

小野木のヒゲ面が緩んだ。

「そう——何でもするってか」

ニンマリと笑つて、カジを見る。

「岸田さんとここに放り込もう。おい尚、あそこ行きだ」

「あいさー、じゃねえな——なんか農園時代に戻つたみたいで懐かしいや。でも、この小芝居こしばいもそろそろ潮時しほときだぜ。このまえ助けたおばちゃんがお礼をしたいって駐屯地まで来たのには焦つたよ」

「ああ、あれか——」

小野木は何かを思い出したように、にっと笑った。

「だつてピンクのダウン着てたんだぞ。ピチピチギヤルと間違えても仕方ねえだろう。しかし、おばちゃんの顔を明るい場所で見ただ連中の顔なつつたらなかったな。五十四つて言つてたつけ？ カジさんも懐かれて困つてたもんな」

「ピチピチギヤル？ そんな死後を恥ずかしげもなく口にする小野木は間違いなく中年だろう。そしてその彼に敬語を使うカジは一つ二つ下といったところか——由里は本来の思考を取り戻したことを確信した。水を向けられたカジがなんとも言えない表情になる。

「ええ、あれには参りました」

男達の会話に惹き込まれていた由里を、使命感が我に返した。何

より、存在を忘れられたかのように扱われるのはたまらない。

「あのう——お話中、申し訳ないんですが……」

「おっと、忘れてた。送るよ。で、お嬢——ええと、あんた名前は？」

「申し遅れました、私は週刊アクティブの記者で仙道由里と申します。改めてお礼を申し上げます。危ないところをありがとうございました」

自衛官の登場によりやく警戒を解いた由里が、腰を折って感謝を告げる。

受け取った名刺をヘッドライトの灯りにかざすと、小野木が驚いたように言った。

「あらま、うちの下の娘と同じ名前じゃねえか。しかも漢字まで一緒ときてやがる。今更、何の取材に来たんだ？」

今日、何度目かの？今更？に、由里はむつとする。窮地きゆうちを救われた恩義は感じるが、上司でもないこの男にそんな事を言われたくない。だが、昨日より続く選択のミスが抗議を思い留とどまらせる。あなた方には分からないでしょうね。報道に関わる人間の使命感よ、という意志を秘め小野木を真っ直ぐに見つめた。

「報道されない真実を女性目線で書きたいと思っています」

「ふうん、報道されない真実か。尚、今お前らが仏さんをほじくり返しているところは、まだ半分ぐらいしか搜索が終わってねえんだろ。ガードレールに巻きついたのとか、赤ん坊抱いたまま亡くなった若い母親とか、めったったそうじゃねえか。あれはテレビじや流せねえよな」

カジと二人で暴漢達をトラックの荷台に放り投げていた自衛官が振り返って答える。

「ああ、それは随分前の話だよ。でも、町の人口から考えても、あそこにはまだたくさん残ってると思う。仏さんが居ゐそうな所は重機を入れられないからな。手作業じゃあ、なかなか捌はからなくてさ。長い間、水に浸ひかっている仏さんは男か女かも分かりやしない。今日、

見つけたのなんか服を引っ張った途端、肉がずるつと削げちゃって大変だったんだぜ」

いきなり、そんなものを見せられるのか……彼等の会話には使命感の腰を砕く充分な威力があった。ふと浮かんだ疑問を添え木にと用いる。

「あなた方は、どうやってそんな情報を仕入れているのですか？やはり、現地の方々に直接――」

小野木が由里の質問を手を挙げて遮った。かえり

「いや、被災した人達は、何が報道されて何が報道されてないなんて知っちゃいけないと思うぞ。なんせ、まだ新聞も郵便も届かない地域だってあるんだ。やっと見られるようになったテレビは写り映え優先、芸能人の炊き出しや嘘くせえ激励であの人たちの生活が戻ると思えるか？俺達はひたすら走り回るだけだよ。どこに何が足りない、どこで誰が困ってる。そんな話を聞きつけては何とかしようと走り回ってるだけだ」

しかし、メディアが映像だった場合、ニュースの価値は視聴率という数字に帰結する。新聞や雑誌なら発行部数だ。マスメディアに身を置くものとして、小野木の指摘は耳の痛いものだった。

「車はどうする？どこか、修理を頼める当てはあるのかい？」

「いえ、支社で訊いてみようと思います」

「じゃあ、カジさんに任せとくんだな。こんな時期だ、どさくさ紛れにとんでもなくボラれるかも知れねえぞ。あんたを送ったらレッカー車で引き取りにきてやるよ」

「車の修理も、やってるんですか？」

その問い掛けには答えず、小野木は続けた。

「どうする？修理する間、大人しくしてるか？何なら、この車で連れてってやろうか、報道されない真実ってヤツの現場に」

粗野な外見と教養を感じさせない話しぶりは由里のレセプター（受け皿）に合わないものだったが、被災地に慣れ自衛官の知り合いも居る彼の申し出は願ってもないものでもある。反撥を感じる反面、

物騒な言葉を吐き続ける小野木に根拠のない安心感も抱いていた。何？ この感覚は…… 回答を待たず、記者根性が反応してしまった。

「お願い出来ますか」

「その代わりといっちゃあ何だが、見たまんまを書いてくれよ。この国は歪ゆがんでる、あんた等マスコミのせいでもあるんだ。同じ画えと同じコメントをテレビや新聞が繰り返し報道すれば、見る側、読む側の多様性も吸収されちまわあ。芸能人が来ない避難所も、さつきみたいな犯罪も、この先この国が向かうだろう苦難も書いてくれると約束してくれるなら案内しよう」

言われるまでもない——彼等の乗って来たと思われる白い大柄なRV車のナンバープレートに目をやると？ 鵜飼？の文字が見えた。識者を気取る地方在住者のメンツを立ててやることで取材がはかどるならお安い御用だ。

「ええ、書きます」

「取引成立だな。カジさん、聞いた通りだ。頼むぜ」

暴漢をトラックに積み終え、自衛官と言葉を交わしていた男が顔を向けた。

「了解です」

「よし、じゃあ出発だ」

「カジさんって方は車の整備士なんですか？ それでレッカーをお持ちなんですな」

「そう……でもあるな、詮索せんさくされるのが嫌いな御人ごじんなんだ。整備士のボランティアが居たつていいだろう。レッカーは俺達のじゃない。ホテルは太白区か？ 乗んな」

被災地を走り回っているRV車はボディも床も泥だらけだった。助手席で揺られながら見る小野木のヒゲには所々、白いものが混じっている。四十後半から五十代前半といったところだろうと判断した。腕まくりした袖から覗く前腕部は太い。きつと、だぶつとしたツナギの下にも逞しい筋肉が詰まっているのだろう。映画でロビン・フッドを演じたオーストラリア出身の俳優が彼の横顔にダブる。決

して二枚目ではないが、頼れる父親といった風貌^{ふうぼう}だった。

「自己紹介がまだだったな。小野木淳一、鵜飼県の中ノ原市ってところで農園をやっている。さっきのカジさんは仕事のパートナーで、若い自衛官は尚、うちの卒業生だ」

その人達は何でここに？ どうして車の修理が出来るの？ 卒業生って何？ 一度に多くの疑問が浮かんでくる。整理して、プライオリティ（優先順位）を決める。

「幾つか質問があります」

「答えられることは答えよう」

「暴漢をどこへ運んだんですか？ 岸田さんって方はどなたなんですか？」

「ノーコメント」

いきなりか——記者としてだけでなく、個人的な興味もあった。推測が的を得ていれば表情の変化からでも真偽は読み取れる。質問の仕方をかえてみよう。由里は別のアプローチを試みた。

「じゃあ、何故あなた方は自衛官を呼べるのですか？ 以前、自衛官だったんですね。卒業生の意味は？」

「ブー、予備自衛官でも、即応予備自衛官でもなきゃ、元自衛官でもない。理由は……そうだな、図々しいからだってことにしといてくれ。卒業生は……そのうち、話す」

はぐらかすような笑顔の小野木に怒りが先に立って表情を読みとるところではない。私は子供じゃないのよ。声にしかけた抗議を喉の奥で止め、別の質問に代える。

「何故、鵜飼県で農園をなさってるあなた方が、ここに？」

「趣味だ。質問コーナー終了」

抱いた疑問に、何一つとして答えを得られないまま一方的に打ち切られる。由里は完全に腹を立てていた。

「太白区とうちゃーく、お宿はどこだい？」

無言でホテルの電話番号をナビに入力する。好奇心を満たしてくれない小野木への、せめてもの抵抗だった。

小野木淳一

「明日の朝、九時に迎えに来る」そう告げて帰った小野木が、時間通りにホテル前の駐車場に車を停めていた。遅くまで原稿を書いていた由里だった。気を抜いたつもりなどないのだが、少し寝坊をしてしまう。窓から覗く泥だらけの車体に支度したくを急せかされたような気分になった。

「遅れて、すみません」

腕時計に目をやり、五分強の遅刻を詫びる。大柄なRV車は、確かFJクルーザーという車だった。ルーフラックに積まれた黒い大きな樹脂製のタンクが由里の目を引く。

「アイメイクのみか——せいぜい十五分つてとこだな。嫁さんにメールしてたとこだよ、気にすんな」

黒い携帯電話をポケットに仕舞いながら、由里を見て笑う。品定しなさだめされたような気がしてカチンときた。乗り込んだドアを強く閉め、嫌味のつもりで言った。

「可愛い奥様は、さぞやお化粧に時間がかかるんでしょうね」

「何で可愛いって知ってたんだ？」

「昨夜、小野木さんが言ったんじゃないですか」

「そうだったか？ 可愛いってたって、もう四十に近いんだがな」と相好さうこうを崩しながら続ける。

「美代ちゃんも確か十分程度だったよ。長かったのはナ……いや、何でもない」

遠い目をした小野木が頭かぶりを振った。嫌みは通じず、何か別のことに気を取られたようだった。一瞬だが、彼の瞳に哀しみの影が過ぎったように見えた。

「じゃあ、行くか」

「かさねがさね、すみません。カメラのバッテリーの予備を車に入れたままなんです」

「そつか、まだ車は動かしてないはずだから寄ってやるよ」

F「クルーザーは長町インターチェンジへと向かった。昨夜は気づかなかつた異臭が鼻をつく。

「何の匂いですか？ これは」

不躰^{ぶしつけ}かとは思つたが、思わずハンカチで鼻を押さえてしまう。

「ん？ まだ、残つてんのか——俺達の嗅覚はイカれちまつたようだな。津波で、着の身着のまま避難した人々だったろ？ 取り残されたペットを運んでたことがあつてな。猫の小便はたまんねえよ」
思い出したかのように顔をしかめる。

「AAか、どこかにですか？」

由里は有名な動物愛護団体の名を挙げた。

「いや、あそこは色々と気になる噂も多い。山間のペットショップで動物達を預かつてくれてるつてのを聞いてそこに運んだんだ。ぼちぼち飼い主が引き取りに来てるそうで一安心^{ひとあんしん}だ。仙ちゃんがこの車に乗るのも今日だけだ。タイヤの手配は出来たみたいだしな。明日には、あの車で走り回れるはずだ。一日だけ辛抱してくれ。使うか？」

小野木はグラブコンパートメントを開けてマスクを取りだす。

「いえ、大丈夫です。でも何ですか、その仙ちゃんつてのは」

「由里ちゃんじゃあ娘と混同する。長いと呼び難い。仙道だから仙ちゃんていいだろう」

馴れ馴れしさへの抗議のつもりだったのだが、小野木は意に介さず飄々とした様子で答えてくる。

「ルーフラックの黒いのは何ですか？」

「質問の多いお嬢ちゃ……記者さんだな。説明するより見た方が早い。最初に行く予定の避難所で使うから——おっと、忘れるところだった。仙ちゃんのお陰だ」

小野木はHと書かれたスイッチを押した。黒いタンクに係のあるものだったのだろう。

連れて来られたのは自衛隊の駐屯地だった。歩哨^{ほしやう}に何事か声をかけ、

指差された方向へと車を進める。黄色く塗られたレッカー車が停められており、空気の抜けたタイヤが頼りなく由里のRAV4を支えていた。山田レッカーと看板の書かれた車体に手を掛けて話しているのは、カジと昨夜の若い自衛官らしい。小野木に気づいて自衛官が手を上げる。クレーンの付いたレッカー車も鵜飼ンバーだった。

「仙ちゃんが車に忘れ物だつてさ。まだ、あつて良かったよ」

「タイヤシヨップは十時からですからね、もう暫くしたら出るつもりでした」

車を下り、言葉を交わす小野木とカジを離れ自衛官が寄ってくる。ドアを開けようとする由里を右手を挙げてで制した。

「取つてあげるよ、どこにあるの？」

バッテリーと空メディアの入ったポーチの在処を告げる。自衛官は身軽な動作でレッカー車に飛び乗ってドアを開けた。これかい？と動く口を認めると、由里は大きく頷いた。

「ジユンさも来るのか？　いくら司令の友達だからって民間人が頻繁に出来りしてるところを見られちゃあマズいんだよ。昨夜みたいな呼び出しも少しは遠慮してくれよな」

運転席のドアに体を預け、自衛官が小野木に話し掛ける。陽光の下で見る自衛官の顔は見事な美を象かたちとっている。涼しげな目元、きれいな稜線を描く鼻、きりりと引き締った口元、そして陶磁器のような肌は、女性にしてもおかしくないほどのキメの細かさだ。視線が交わった瞬間、由里は耳たぶの温度が上昇するのを感じた。何を赤くなっているの、初心つひな女子高生じゃないのよ、と自分を叱咤する。小野木達が自衛官を呼びつけたり駐屯地に出入り出来る理由は、彼等の会話から理解出来た。

「しいつ、部外者の前で迂闊なことを口にするんじゃないよ。ハツチに迷惑がかかるだろうが」

「だからさあ、司令をハツチって呼ぶなって。そっちの方が迷惑だと思うぞ」

「服部だからハッチ。ガキの頃からそう呼んでんだから今更、直らねえんだよ。固いこと言うな」

「町村―出発するぞ」濃いグリーンに塗られたトラックから声がかかる。

「じゃあ、先に行ってる」

町村と呼ばれた自衛官は深くヘルメットを被りトラックの荷台へと姿を消した。

「尚の入ってる亘理^{わたり}まで上^{のぼ}って、荒浜地区、港と下^{くだ}ろつ。戻るまでは仙ちゃんの車も直ってるはずだ」

「亘理に入るには通行証が要るんじゃないですか？」

関係者以外の車が邪魔になって復旧作業が進まず、町が通行規制を敷^しいたと聞いていた。

「え？ 先週も行ったけど、そんなもん見せろとか言われなかったぞ」

解除されたのだろうか？ それとも小野木達の通行が許されているのか――考えを巡らす由里に携帯が震えてメールの着信を知らせる。

『いい記事だ、主観^{かたよ}に偏ることなく、要旨^{ようし}を外^{はず}さない。上川の文体に似ているな。引き続き頼む。以上』

デスクからだった。短い文面だったが、滅多に記者を褒^ほめることのないデスクの賛辞に由里のテンションは上がった。

東部道路を下る景色は、昨日と変わらないように思えた。しかし、やはり沿岸部に近付くほどに悲惨な様相を顕^{あらわ}にするのだろう。

「ラクールは何箱買った？ 二十九か……足りねえな――他のMRにもあたってくれ」

誰かと無線で話していた小野木が送信機を置くのを待つて、当たり障りのない話題を振った。

「被災地の復興にはどのくらいかかると思います？」

「復興か……何を以て復興って言っただろうな――俺には分からねえよ。とりあえず、あんな状態になっちまった建物や線路を戻すのは復興じゃない、一からの作り直しだ。こっちの人には申し訳ない

けど、七十センチから沈下^{ちんか}しちゃった土地は元通りにはならねえんじゃないのかな。だったら、そこにソーラーパネルを張り巡らせて原発の代用をさせちまえ。空いた場所へは、放射線を吸収するひまわりとか菜の花を植えまくるってプランはどうだ？ それなりに雇用も生まれるだろうさ」

本気で言ってる？ 夢物語のような話を滔々《とうとう》と語る小野木の横顔を由里はまじまじと見つめた。

「だがな、現実はこのだ。一次産業だけじゃない、自動車や鉄鋼メーカー、製紙に製薬、お医者さんも銀行も保険屋も全てが根こそぎやられちまってる。大企業の論理で、生産コストが安くてすむことに片っ端から工場を移転してきた。勿論、受け入れる側も企業誘致の恩恵には預かったろう、雇用や税收でな。ただ、その下請けとなった中小企業の扱いはひでえもんだぜ。仕事があるうちは食うには困らないが、正に生かさず殺さずの賃金だ。そんな会社が津波で二カ月も休んでみる。従業員に給料払った時点で倒産だぞ。立て直そうにも蓄えがねえんだからな。いくら国が無利子で貸してくれるたって返さないで済む訳じゃない。どのみち辞めるしか途^{みち}はねえんだよ。既にあちこちで関連倒産だってあるんだろ？ 未曾有の経済不況が来るぞ」

「随分、悲観的な見方ですね。でも日銀総裁の話では、復興需要と相まって秋口には景気も上向くと言っていましたよ」

小野木がうんざりしたような顔をする。

「あのな、日本の財布が『この国の経済はぼろぼろで立ち直る見込みはありません』って言うか？ 防衛大臣に、この国に核はありますか？ って訊いてみる。ないって言うに決まってるだろうが」

「あるんですか？」

穏やかでない小野木の発言に由里は身を乗り出す。

「なきやあ、なんで基地近辺の放射線数値が高いんだよ。自衛隊機が原発を行き来してる訳でもないだろう」

明確な答えは得られなかったが、どこか含みを持った言い方が気に

なった。しかし、昨夜の様子から、しつこく食い下がると口を閉ざしてしまふだろうと思い、次の質問に変えた。アイスブレイクのつもりで始めたそれに完全に惹き込まれていた。外見も言葉遣いも野蛮人を体現しているかのようなこの男に、こんな知識があるとは思ってもみなかった。

「政府の対応は、どう思われます？」

「可愛いお嬢……おっと、失敬。女性とのドライブに相応しい話題でもなさそうだが、まあいい。俺は政治家が全部悪いなんて思っちゃいねえぞ。ただ、船頭が——船の頭の方な。それが多すぎて利害が交錯するから、何をするにも時間がかかり過ぎる。会期の150日かけて何一つ決められねえような連中には期待出来ねえよ。官僚や議会がヘソ曲げたら政策が進まないって体質も問題だな。有事には総理大臣に大統領権限を与えるって法律でも作っちまえばいいんだ。で、動かないヤツ等のケツをぶつ叩くんのだ」

「現政権を支持なさるんですか？」

「そうじゃねえよ。でも、自治体や全漁連の陳情を聞いたのは現総理だろ？　ここで頭が変わってちゃあ、ただでさえ遅い対応が余計に遅れちまわあ。足の引っぱり合いをしてる場合じゃねえんだよ。

勿論、統一地方選なんざ、取りやめるべきだったんだ。こんな時期に選挙やつてる場合か？　奴らの演説を聞いてみる。当選した暁には、じゃねえんだよ。今、出来ることをやれってんだ。私はいざとなったらヤル人間だなんてヤツも信用しちゃいけねえ。そんなのに限って九年は何もしやしねんだから」

「何なんですか？　その九年って」

「かつて俺が何もしなかった年月だ」

小野木の表情が曇る。何か訳がありそうだなと思ったが、それに触れるのは憚られた。

「復興庁も復興支援会議も出来ず。総理が変わっても対応が遅れるとは限らないと思われませんが」

「こっちの人達は、そんなの待ってらんねえんだってば。未だに現

地に足を運んでもいない連中が、のんびんだらりんとやってる会議が何の役に立つ？ 頭を使うのは後だ、先ずは身体を動かさせ。金勘定の得意な連中を送り込んで、早く義援金を分配しろってんだい」

小野木の語気が激しくなっていく。

「では、小野木さんが大統領権限を持ったら、どうなさいます？」

「国家総動員だな。全国民に一人一日でいい、こつちに来てガレキの撤去でも年寄りの相手でもさせるんだ。崩れかけた建物に入って行方不明の身よりや思い出の品を探す人達が居る。手早く片づけないと危なっかしくってしょうがねえ。いくら飽きっぽい国民でも、この惨状を見れば何か感じるものがあるはずだ。誰にだって特技の一つぐらいあるだろう？ それを、ここで生かしてくれねえもんかなと思うよ」

「善意は強要するものではないと思いますが」

「そうだな、じゃあ今後はレイプされそうな女性が居ても放っておこう」

意識の外からくる反撃に返す言葉を失った。唇を噛んで睨む由里の視線に気づくと小野木は首をすくめる。

「冗談だよ、おつかねえ顔すんなって。おおかた、声が出せねえ状況だったんだろ？ 分かっているってば。俺が言いたいのはだな、善意を失くしちゃった連中には強要するしかないんじゃないかってことだ。あるもんなら自然と沸いててもこようさ。でも、ないものは新たに植えつけるしかない。そうじゃねえか？ 自衛隊、警察、ボランティアだけに頼ってちゃダメだ。俺達の国なんだぜこは。十都県、百六十以上の自治体が被災したんだ。どうにか今を乗り切ったとしても、いずれ適応疲労はやってくる。対岸の火事だなんて思っていると、それを乗り切ることなんか出来やしねえぞ」

適応疲労？ 何を意味しているのだろう。後で調べてみようと思ふと由里は頭の中で付箋を付ける。

「でも、人類には幾多の苦難を乗り越えてきた叡智があります。阪神淡路大震災だって、中越地震だって――」

小野木が言葉を被せてくる。

「じゃあ聞くがな、その叡智を持った人類様があの津波に立ち向かえたか？ 人間はちっぽけだぞ。一番でっかいアンドレ・ザ・ジヤイアントを千人防潮堤に並べたって太刀打ち出来やしなかったろうさ」

アンドレ・ザ・ジヤイアントってのは誰なんだろう？ 何かの比喩ひゆなのだろうか。これも検索すべき？ 由里は付箋を付けるか付けまいか迷う。

「そして今その、叡智が生み出したものに苦しめられている人々が居る」

「原発のことですね」

「ふああ」

腑抜けたような返事の小野木に調子が狂った。欠伸あくびを噛み殺していたようだ。由里は情報を整理して建て直す。

検問

「復興財源ふっくしやいげんについては、どう、お考えですか」

「俺は経済学者じゃないぞ。インタビューする相手を間違えちゃいねえか」

「いいえ、非常に興味深いお話しを伺えていると思ってます。被災者の方々を代弁するつもりでは非——」

「被災者の代弁か——見てくれで、物を言ってるだろ」

苦笑しながら由里をちらりと見る。小野木を初めて見た時抱いた印象に、彼自身、自覚もあつたのだろう。

「まあいい。俺はこの大震災は国家的危機だと思ってる。それなのに財源を増税や年金負担分の前借りで賄まかなおうとしてやがる。違うだろう、祖国がなくなつて金だけ残つたつて何ともなりやあしねえぞ。特定財源でも特別会計でも取り崩せばいいじゃねえか。霞が関の埋蔵金でもいい。奴等が野党だった時、散々言及さんさんげんきやうしたそれはどこへ行つちまつたんだ？ 無利子・無記名国債を発行するのもいい。

税金を払いたくない大金持ちが先を争つて買うだろうさ。一度すつからかんになつちまえばいいんだよ。国を作り直すいい機会だと思ふがな。奴らの好きな言葉じゃねえか、抜本的改革つてヤツさ。これを契機にゼロから建て直すんだ。何だ？ あれは」

小野木の指差す先には、回転灯を点灯させたパトカーが止まっていた。

「通行証？ そんなもんが要るようになったのか——いつからだ？」

「先週からだよ、あんたの車も他県ナンバーだ。そういう冷やかしの連中が乗ってくる車のせいで支援物資を運ぶ車や作業車両が通れなくて迷惑してるんだ」

「冷やかしとはなんだよ。俺は被災してすぐこっちに入ってたんだ

ぜ？ それにどこのボランティア団体にも登録してないから、そんなもん誰もくれやしねえし、聞いてもいない」

「だったら、何で登録しておかなかったんだ」

「現地に入ってんなら、あんらだつて分かるだろう。言われた通り動いてちゃあ、必要な所へ必要な援助なんてのは出来やしねえんだ。そんならせめて俺達だけでも小回りを利かそうと思つたんじゃないか。ボランティアの地域格差ちいきかくさの是正せせいってヤツだ。なあ頼むよ、この支援物資を待つてる人達が居るんだ」

「通す訳には行かん。それは支援物資受付に持つて行くといい」
「意地の悪い関所の番人みたいなこというなよ、報道関係者だぞ、このお嬢ちゃ……女性は」

「報道関係者も通してない」

そう言つた警官の背後を、別の警官に誘導されてテレビ局の社名が書かれた車両が追い抜いて行つた

「なんだよ？ あれは」

小野木が憮然とした表情で通り過ぎた車を指差す。警官は一瞬気まずそうな顔をしたが、険しい顔に戻つてこう告げた。

「然しかるべき手続きを踏めば通行証がもらえるつてことだ。ここに車を停められてちゃあ迷惑なんだ。さあ、行つた行つた。本当は昨日今日、物見遊山に来たんじゃないのか」

「何だと、この野郎」

手をひらひらさせて犬でも追い払うかのような警官に、小野木はドアに手を掛け飛び出して行こうとする。ひやひやしどろしだった由里は彼の腕を掴んで、なだめるように言つた。

「他にもあるっておっしゃいましたよね？ 報道されていない真実が。そちらを先にしたらどうでしょう」

「ちきしょう、覚えてやがれ」

由里に諭されてドアハンドルから手を離す小野木だったが、素面で警官に捨て台詞を吐く男を初めて見た。鼻息も荒く方向転換をしようとした彼が、対向車線に停まつたジープに目を留め声を上げた。

「あ……ジエイクじゃねえか、おいジエイクー」

車から降り立った黒人兵士に呼びかける。米軍かしら？ 『おい』じゃあ通じないでしょうに——そんな小野木の行動に呆れたが、意外にも兵士は彼をみとめて歩み寄ってきた。

「Oh, Hi, June. Got a problem with something?」

「See, I'm a mess in this situation. He said——」

小野木は口角泡を飛ばす勢いで、身振り手振りを交えてまくしたてる。ジエイクと呼ばれた米兵は両手を広げたり肩をすくめたりしながら頷いていたが、ジープに戻ると同乗していた自衛官に何事か告げて小野木に向かって親指を立てた。自衛官は検問の警察官に歩み寄って、こちらを指差しながら話している。

「通つていい」

「おうとも」

粗暴な返事で、警官が移動したパイロンすれすれを走り抜けて行く。

「——つたく、けつたくそ悪い奴だぜ。ジエイクがいいっていいばいいのか？ 戦後の進駐軍様かつつの」

困ったオジサマね、駄々っ子みたい。なおも、ぶつくさ言い続ける小野木に仕方なくご機嫌伺いを仕掛ける。

「小野木さんは、英語が話せるんですね」

「ああ、アレか——嫁さんが中学の英語教師なんだよ。NHKの英会話と映画で覚えた俺の発音は相当いい加減だったらしく。再教育してやるってなもんで、お許しが出るまでずっと家庭内の会話が英語似されちゃってな——酷い目にあつたぜ。俺は生徒じゃないってんだ」

眉尻を下げて困惑の表情を見せる小野木に、思わず嘖き出してしまった。

「なんだ、仙ちゃん笑えるんじゃないやねえか。昨夜からずつつと怒っ

たような顔をしてるから鉄の女なのかと思ってたぜ」

「意味もなく笑うのが嫌いなだけです、さっきの米兵はお知り合いないんですか？」

「ジエイクか？ 以前、奴等が乗ってた車がエンコしてたのをカジさんが直してやったことがあってな。で、お前らもボランティアかって聞くから、そうだ、救援物資を運ぶなら手分けしてやるうってことになって、以来あちこちでよく顔を合わせてるうちに仲良くなったって訳さ。大きな声じゃ言えねえが、この車のガソリンも奴等からもらってる。緊急車両以外は売ってくれない時期があつたんだ。しかし、アメ車つてのは湿度と埃に弱いもんだな。砂漠もハリケーンもある国なのに――」

脱線しかける小野木を由里のフィールドに呼び戻す。自分の話したいことは放っておいても話し続けるが、そうでない話題には口をつぐむ。小野木はそういった種類の人間らしい。

「原発はどう思われます」

「ん？ お堅い話に逆戻りか、いいだろう。そうさな――人は豊かな生活を求める。その基盤となるのが、仕事だ。政治家は政治の場に、電力会社は原発にとしがみつく。それを脅かされれば誰だつて必死になるだろう。一つでも炉心を残そうとしたのは当然だろうな。避難民が食糧を必死に求め。よりよい生活のために仮設住宅を求めるのだって同じことだ。出て行け、撤廃しろっていうけど、誘致してその恩恵に授かってたのは誰なんだ？ ここを先途と、反対反対と叫ぶ連中は何でもつと前からやんなかったんだ。こんな時代だ、調べようと思えば原発の危険性なんていくらでも調べられたはずだろ？ 事故が起き災難が自分の身に及んでから騒ぎだすんじゃない。俺は肯定も否定もしない。あつて困る人も居るが、なくなつて困る人だつて居るんだからな。ほれ、あつちを見てみる」

彼が指し示す沿岸部の被害は尋常ではなかった。ガラスのなくなったコンビニの店内にはガレキがなだれ込み、何艘もの船が骨組みだけになった建物の間に横たわる。防波堤も防風林もなぎ倒され、

建物の基礎さえ引き剥が^はされている。田植えの時期でない水田に張られた水は海水なのだろう、これが引く日が来るのだろうか？ 言葉を尽くして語れるものではない半面、たった三文字に形容されもした。ひどい……と。

小野木が運ぶもの

「失礼ですが、小野木さんはずっと農園をなさっているんですか？ 巡査じゅんさって呼ばれていましたよね」

暴漢から救われた昨夜来、居座り続ける不快感がある。それは依然として明確にならない小野木の素状すじょうだった。警官に掴みかかろうとする粗暴さと、彼が語る話の内容は由里の価値観に於いて相容あひいれないものだった。一体、何者なんだろう？ 嚥下えんげを拒み喉の奥に張り付いた錠剤のような感覚が、その問いを言葉にした。

「警官の巡査じゃなく片仮名のジュンさだよ。俊夫ならトッサ、淳一の俺だからジュンさって呼ばれてる。故郷こきょうの方言だな。農園をやる前は普通のサラリーマンだった。何でそんなことを聞く？ 俺みたいな小汚こぎたない一市民いちしみんが国を憂うれいちゃダメか？」

「いえ、そういう訳では——ただ、昨夜は何も答えてくれなかったでしょう。身分を明かせない事情でもおありなのかと」

「ああ、眠かったんだ。悪い」

小野木の秘密主義はあっさりと披歴ひれきされた。

「着いたぞ」

車を乗り入れたそこは公民館だった。洗濯物が干され、仮設トイレが立ち並ぶ見慣れた光景が避難所であることを物語る。

「まずはシャワーだ」

ライフラインが復旧しているの？ 道すがら目にした惨状からは、とてもそうは思えない。水も電力も貴重な避難所でシャワーを浴びようとする神経を疑った。由里は冷たく言い放つ。

「私は結構です」

「仙ちゃんじゃねえよ、見てみたいけどな。ガキどもだ」

「なっ……」

しれっとした顔で言う小野木を睨みつけるが、意に介さぬ様子で彼はクラクションを鳴らした。

建物の中から数人の子供達がわらわらと飛びだしてきた。何故だか半裸の子供も居る。

「ジユンさだー」

「おう、来たぞー並べー」

荷室から取り出したホースをルーフラックのタンクに取り付けると、シャワーヘッドのついたホースの先を少年に手渡す。同様に反対側のユニオンにも取り付け、小さなテントを組み立てる。

「みんなが同じように温あつたまれるように、一人、三十数えるまでだ。ヒトシ、女の子の方を覗くんじゃねえぞ」

「ジユンさだろ、スケベは」

そんな少年とのやり取りは、ここへ足を運んだ回数が一度や二度ではないことを由里に確信させた。

「お湯が入れてあつたんですか」

タンクを見上げる由里に、小野木が肩を並べる。

「ただ走ってるだけじゃあ勿体ないからな。お陽さまが照れば水も温まる。そんでは足ならないから熱交換器と電熱コイルを通して温める」

けさがた

今朝方、小野木が押したHと書かれたボタンを荷室から指し示す。「カジさんのハンドメイドだよ。三百リットルじゃあ、あつという間になくなっちゃうけど、ガキどもの数人なら身体も洗える」

暫くすると他の住人も建物を出てきた。二十人足らずだったが圧倒的に老人が多い。一人の老婆が小野木に歩み寄ってきた。

「いづもすまねえな、ジユンちゃん」

「水臭いこと言うなって。婆ちゃんは、俺の死んだおふくろにそっくりなんだ。親孝行、したい時には親はナシって言うけど、俺は婆ちゃんのお陰で出来てる。礼をいうのはこつちだぜ。土産があるぞ、温湿布だ。膝が痛いって言ってたろう？ で、こつちがいつも栄養剤だ。炊き出しばかりじゃ栄養が偏っちまうからな。おい、若いの——ええと、新沼だっけ？ 降ろすの手伝ってくれよ」

様子を見守っていた青年が荷室に上体を入れた途端、鼻をつまん

で言つた。

「くつせえ、また動物を運んだんか」

「中身には臭いも染みついてねえやな、文句ゆうな。それと今回の俺の屁だ。来る途中、デカイのが出てな」

「何食つてんだよ、一体」

若者が大きな笑い声を上げると人々も一緒になつて笑つた。同乗していた由里は、そんな事実がなかったことを知っている。道化まで買つて出る理由は何なの？ 彼の行動は由里の理解を超えていた。

「その別嬪さんは？」

青年が由里に視線を送る。

「うちの娘だ、手え出すんじゃねえぞ」

「ジユンさんの娘が、こんなキレイなはずねえべ」

「女房似なんだよ」

「何番目のだあ」

「バツカヤロー、結婚したのは二回こつきりだ」

「二回してりやあ充分だ、こつきりつていうなや。あんた、見る度にむさ苦しくなってくるな。ヒゲぐらい剃れつて」

「ワイルドでいいだろ？ これで役場に並んだら義援金受け取れるんじゃねえか」

「それ狙いかよ」

そこかしこで湧き起こる笑いは、避難所で暮らす人々のそれとは思えない明るさが感じられた。彼が運んでいる物は支援物資だけではないんだ。由里はでこぼこになつた路面を段ボールを何段にも積み上げて台車を押す小野木の背中を見つめていた。

「ジユンちゃん、いつもやっておくれよ」

中年の女性の声に、頭を掻きながら小野木が答える。

「しょうがねえなあ、待ってたのか？」

いつものとは何だろう？ 由里の疑問はすぐに氷解する。小野木が車から持ってきた細長いバッグを開いて取り出した物はパースの

狂った弦楽器のように見える。

「ギター……なんですか？ それ」

「ああ、こんな寸詰まりでもちゃんと鳴ってくれる。バックパッカーって言うんだ。こいつは拾ったんじゃないやねえぞ。尚のを拝借してきたんだからな。俺のリサイタルだ、聞いててくれよ」

そう言つて、チューニングも確かめないうままギターをかき鳴らし、調子つ外れの声で歌い始めた。

「先ずは石川さゆりちゃんメドレーだ」

「おんもいだします、忘れんぼう」

——どっちなんだあ——

「あまいーこーえー」

——ガラガラじゃねえか——

「いーまでは指輪もー、まーわるーホモー」

——栄養失調かあ——

「大きな野茂から、小さな野茂まで——」

——あはは、農機具じゃねーぞ、野茂は。

家や家族を失くした人々が、笑顔で口々に囁いたてる。野次にめげることなく壇上^{だんじょう}で歌い続ける小野木の姿に、胸にこみ上げるものを感じずには居られない由里だった。許可を得て、ひたすらシャッターを切る。人々の笑顔をカメラへと収め続けた。

「また来るからな——」

避難所の住人に見送られて出発するFJクルーザーを、走つてついでくるのはヒトシ少年だった。

「危ねえってば、ちゃんと来るから帰れって」

「絶対だぞ」

「俺が嘘つくのは女にだけだ」

坂が下りになると、立ち止まって手を振り続ける少年の姿が見えなくなつた、

「感動しました。誰にでも出来ることではないと思います」

「よせやい、照れちまわあ」

しかし、その照れ笑いは一瞬で消え真面目な表情になる。

「ここへ来てこの状況を目にした俺達は最初、何をしていたのか分からなかった。きつと昨日の仙ちゃんも同じ気持ちだったろう。そんな時、思い出したのが別れた女房の言葉だったんだ。人の痛みに寄りそってみろってな。そうすれば、彼等が望んでることが見えてくるんじゃないかと思った」

「痛みに寄りそう……ですか」

「うん、俺達は雑草だ。彼等を苦しみから救いだすことは出来ない。ただ、歩き疲れ腰を下ろしたくなった時、道端に生い茂っていた座布団の代わりぐらいにはなれる。それが俺達の行動原理だよ」

「だから、小野木さんはそんな格好で？」

「ツナギのことか？」

「ええ、それとそのヒゲ。最初にあなたを見た時、被災者かと思いましたよ」

「ツナギは農園のユニフォームだよ、ヒゲは……」

口ごもる小野木を、語尾を復唱して促す。

「ヒゲは？」

「来てすぐの頃はお湯も使えなきゃ、シェービングフォームを買う所もなかった。圧倒的に物が不足してたんだよ。で、俺は……」

「俺は？」

再び、言い難そうにする彼に同じ手法を重ねる。

「誰にも言うなよ。記事にもするな」

「しませんよ、そんなもの——その本音を由里は「はい」に代えた。「俺はな、お肌が弱いんだ。お湯でよくふやかしてからでないと剃った所が真っ赤になっちゃうんだ。だからずっとヒゲを剃ってない」

お肌って——似合わない——真顔で答える小野木の横顔を見つめ、笑ってはいけないと思いつつ堪えることは出来なかった。ぶつと由

里の口から大きなしぶきが飛び出して小野木のこめかみ辺りに飛んだ。

「雨か？ いや、晴れてるよな——タンクが漏れてやがんのか？」
見当違いな推理で頭上を見上げる小野木に我慢のタガが外れた。

「何、急に笑いだしてんだ？ 変なヤツだな」

嬌声きょうこせいを上げて笑う由里を怪訝そうな目で見つめる小野木の顔が涙で滲む。もうだめ、お腹痛い。こんなに笑ったのは何年ぶりだろう。何不自由ない都会暮らしのなかで忘れていたものを取り戻せたような気がしていた。

「町村さんも、亘理に来ているんですね」

「おつ、気になるのか？ 無理もない、尚はあのマスクだしな」

「そんなんじゃないやありません。先に行ってるって言われてたからどこかで合流するのかと思っただけです」

「隊で動いてる時にそんな好き勝手は出来んよ。呼び出せたのも夜だからで——あれ？ 何でそう真っ赤になってるんだ？」

視線も振らずに言う小野木に、凶星を指されたような気がしてムキになる。

「なつてませんっ」

意識したより大きな声になってしまった。運転していた小野木はビクツとして車を蛇行させた。

「びつくりしたあ」

「あ、すみません。つい……」

「いや、いいけどさあ。なんで、俺の周囲にはこう声のデカイ女性が集まるんだ」

後半は過去に思いを馳せるような目になって小野木が呟いた。

「陸前高田方面も被害が甚大だそうですね」

「うん、八戸から茨城まで沿岸部はどこもあだだよ。でも、報道されない真実を女性目線で——仙ちゃんはそう言ったよな？ ビル

に乗った船は、誰が見ようとビルに乗った船なんだ。ニユースバリューはあっても、それはただの哀しい現実でしかない。俺が仙ちゃんに見せたいもんはそんなじゃないんだ。」

「なんで、私に親切にして下さるんですか？」

「別嬪さんだから——って言いたいところだが、そうじゃない。」

今日の話は今まで来たテレビ局にも新聞社にも話した。だけど、誰一人として書きやしねえ。上の方に報道管制でも敷かれてるのかも知れねえな。ジャーナリズムってのは、おためごかしか？ 使命感ってもんはねえのか？ 口を開けば国民は真実を知る権利があるとかぬかすが、本当どこも書けずに何がジャーナリズムだってえの」

報道管制？ そんなことがあったのだろうか……一雑誌記者である由里には分からないことだった。しかし、少なくとも由里が推敲を受け持った原稿には、ここに来て体感した事象は書かれていなかったように思われる。小野木の言った通り、哀しい現実に読者の興味を惹きそうな見出しをと、頭を悩ませていた自分が恥ずかしく感じられた。

「例えば、どこそこの自動車メーカーが被災したうちの車は撮るなど言えば、いきなりその露出が減る。大事なスポンサー様だからな。原発に関する報道が遅れたのだから、その辺が理由なんだろう。そうこうしてるうちに流せる映像は限定されちまう。被災した人々に思い遣りをとかなんとかいっても、その姿を飯のタネにしてるんじゃないやねえかマスコミは。取材に来てたつた五日ぐらい風呂に入れねえ生活をしたからって、帰れば家も仕事もある連中に彼等の気持なんか分かりやしねえんだ。テレビのリポーターも気取ってデューペチ力なんか着てくるんじゃないやねえ。そんなもん戻ればいくらでも買えるだろう。寒さに震える人に置いて行け。長い髪を縦ロールにしてメイクばつちり、きれいなネイルで来るんじゃないやねえ。レイプされたって助けてやんねえぞ」

小野木の言葉に怒りが混じりだし、由里は神妙な面持ちとなる。

「私が叱られているような気がします」

「あはは、悪い悪い。つい、興奮しちまったい。俺は国民が本当に知らなければいけないことを仙ちゃんに書いて欲しい。自分じゃあ出来ないことを頼むんだから、こうしてる。分かったか？ だから遠慮すんな」

「小野木さんご自身で書こうとは思われなかったんですか？」

「ブログでも起こせつての？ 残念ながら俺の文章力じゃあ、手紙一通まともに書けやしねえんだよ」

「分かりました、全力を尽くします。もっとお話を聞かせて下さい。あのレッカー車はどちらのなんです？ 山田レッカーと書かれてましたよね。もう一人の方はカジさんと呼ばれていたはずですが、しかも鵜飼県のナンバーでした。他にも支援者が居られるんですか？」

「なかなか鋭い観察眼をお持ちのようですね」

「茶化さないで下さい」

美代ちゃんみてえだな、と小声で不満を漏らすが答える意志までは失くさなかったようだ。

「いくら人間嫌いの俺でも五十年も生きてりゃあ、あちこちに関わり合いは出来ちまう。支援者って言うなら俺が今ここで生かされてること自体、多くの支援者あつてのことなんだよ。あのレッカー車は中越地震の時に、被災した車の移動やガレキの撤去に必要なったことを知ってた或る人が使ってくれて農園に届けてくれたんだよ。身内の自動車解体業のなんだそうだ。こっちに来るか来ねえかウジウジ迷ってた俺を後押してくれたのは、そういった人達なんだ」

車の墓場

「莫大な寄付をされた会社社長が居られますよね。あの件については、どう思われます」

「太陽光発電に大金を注ぎ込んでから原発を非難してるんじゃないかって話だろ？ 寄付は寄付だよ。そんなんで疑ってちゃあ、生きて行くのが嫌になっちまうぞ。芸能人の炊き出しだってそうだし、売名行為と言われようが何だろうが、何もしないで批判してるだけの連中よか遥かにマシじゃねえか」

巷でも意見の分かれるその行為に、小野木は否定的だと思ったのだが違ったようだ。

「カジさんという方について教えて下さい。彼はどうやって、あの暴漢達をあんな一瞬で——」

「詮索されるのが嫌いな人だって言っただろう」

由里が言い終わるのを待たずにそう言った小野木に、調子に乗りすぎたかなと臍はそを噛む。しかし小野木はニンマリ笑って話し始めた。

「俺から聞いたって言うなよ。カジさんは世界を嘱望じちくぼうされたプロボクサーだった。天は人に二物にぶつを与えずと言うが、彼に限ってはあてはまらねえな。優秀な興信所の調査員でもあり、手先の器用さも目を見張るものがある。自動車の整備だって出来ちゃうんだ。羨ましい限りだよ」

プロボクサーか——閃光のようだったカジの身のこなしに得心とくしんが行った。次の質問だ。

「昨夜は、かなり物騒な台詞を口にされていましたよね。全てお芝居だったんでしょう」

「ああ、こつちに来てからは誰も殺しちゃいない」

こつちに来てからは？ その返答に内包されたものを考える由里を、胸間声むまなこが呼び戻す。

「ここいらが荒浜地区だ。見ての通りひでえもんだろ。あの学

校が残ったのが不思議なくらいだよ」

ガレキとヘドロに覆われた街の残骸は道路幅も狭めていた。引かない海水が運河との境界も曖昧にしている。自衛隊や作業用の車輛が正面に見えると、小野木は遙か手前で車を寄せて対向車の進路を確保する。クラクションを鳴らして抜き去って行った後続車が、路肩にも寄れずに右往左往する様を、彼は無言で見つめていた。窓の外にはハイメディックと書かれた救急車がガレキに埋もれている。地震の負傷者のために出動した所を津波に襲われたのだろうか——隊員はどうなったのだろうか？ 出動依頼のあった所へは辿りつけたのだろうか？ 思いを巡らす由里に小野木が言った。

「救急車だけじゃないぞ。消防車もハニーワゴンもあの辺に転がってる」

「何ですか？ ハニーワゴンって」

由里の語彙ことばにない単語を訊ねた。

「ああ、バキュームカーだよ。アメリカじゃそう言うらしい。ジエイクに教わったんだ。ここは通過するだけだ。写真を撮りたいならここで待つてるぞ」

「……いえ」

訪れなければ知ることのなかった現実が、由里に喝破かつぱを迫っていた。カメラのフレームに収まるもの、テレビ画面に映し出せるものだけでは被害の全容を伝えることなど出来ないのだ、と。小野木は満足そうに頷いて車を発進させた。

フェンスに叩きつけられ動力伝達系を晒ひらし出す車、防潮林に不自然な形で突き刺さった車を眺めながら仙台港へと向かう。民家の少ない地域のせいか、沿岸部であっても先ほどまでの景色とは様相が異なる。ガレキに埋もれた町を眺め続けてきた由里には、少しだがホッとするものがあつた。

「火が上がってたのは、あの辺りらしい。消防も来れやしないんだから燃え尽きるのを待つしかなかったんだろっな、可哀想な話だ

よ。道路のヘドロは随分片付いたみたいだな」

ベニヤ板で施設の入り口を閉鎖されたフェリーターミナルに車を乗り入れた。

「ここは、東北の自動車の集配拠点になってたんだ。あちこちにメーカーのヤードがある。津波を食らったのは数十万台の使用過程車だけじゃない。ここだけで数千台の新車が津波の被害を受け、未だ相当数が海の中で眠ったままなんだ。車の墓場になっちまってるんだよ。こういった被害はここだけじゃない。水戸でも横浜でもある。場所も公開されていない大きな保管倉庫があるんだ。バカでかい立体駐車場を想像してみるといい。あつちでも揺れはひどかったからな。吊り上げられた車同士はベーゼ（キス）を繰り返して傷モノになり、エレベーター孔に落ち込んだのは撤去する見通しも立っていない。それだけで、数百億が消えている。間接的な被害はこれからまだまだ増えて行くぞ」

編集室で感じた揺れも確かにひどかった。東北の凄惨さに相殺された訳でもないのだろうが、コンビナート火災の鎮火と共に報道は激減して行ったように思う。小野木の話は、初めて耳にするものだった。

「この先の塩釜港も、まだ僅かしか航路が確保されていないと聞いてます。流された車のせいなんですか？」

「車もガレキも何もかもさ。喫水きつすいの深い大型船舶が入れないとなると港の機能はいつまで経っても戻らねえよ。でも、全てをさらい上げるなんて不可能だ。沖へ流されて行くのを待つしかないんだろうな」

「何故、小野木さんはそんな事をご存じなんですか？ 関東も見て回られたんですか」

「情報はそこかしこにある。目を凝らし、耳を澄ましてさえいれば誰にだって届くさ。後はその真贋しんがんを見極めて組み立てて行くだけだ。なあ、仙ちゃん。いつから、この国の人間は考えることを止めちゃまったんだ？ 俺はそっちの方が不思議でならねえ。明日は我が

身なんだぞ。新たな地震が来る来ないって話じゃない、金を送つたらもう過ぎたこと、支援物資を出したから終わりって話じゃねえんだよ。何で、海外のお医者さんや軍隊が来て同じ日本人が来ねえんだ。今こそ高村光太郎を読んでみろってんだ。俺の心配が杞憂きゆうに終わるならいい、俺一人が笑われれば済む話だからな。そうじゃねえと思うから必死になつてんだ。何で誰も気づいてくれねえんだ？」

ヒゲ面から発せられる高村光太郎の名には違和感も覚えたが、遠い水平線に目を据えたまま語り続ける小野木の怒りは理解出来るように思えた。

「保険は適用されないんでしょうか」

言つた途端に後悔をする。自動車メーカーだけが救済されようと焼け石に水なのだ。間の抜けた質問だと笑つか叱責されるのだろうな——そんな思惑とは裏腹に小野木は真摯しんじに答えてくる。

「津波や地震特約をつけてるのは全契約者の一割程度だろうな。ナンバーの付いてない新車じゃそれにも入っちゃいねえだろうし。それに保険屋にだって払う金が残つてるとは限らねえ。客から預かつた金の運用先を海外のインフラファンドか何かに限定してればいいけど、国内の株価はあのザマなんだからな」

出張直前に書いていた記事を思い出した。個人投資家も証券会社もが関連被害に晒ひびされる中、損保とて例外ではないだろう。小野木が語つた言葉が重みを増してくる。未曾有の経済不況が来るぞ——由里は身震いを覚えた。

届かない叫びのもどかしさか、海面に反射する陽光が小野木の瞳に哀しみを浮かび上がらせる。ツナギの袖でゴシゴシと顔をこすると彼は由里に向き直つて言つた。

「俺のガイドは終わりだ。送ろう、車はホテルに届いているはずだ」

港からホテルまでの間、あれほど雄弁ゆうべんだつた小野木が全くと言つていいほど口を開かなくなつていた。由里が提起ていきした話題にも、あ

あそつだな、と生返事を返すのみ。何か怒らせるようなことを言ったのだろうか？ 思い返してみるが心当たりはない。

「しつかりな」との言葉を残し走り去る小野木の泥だらけの車を見送る。真新しいタイヤに履き替えられた由里のRAV4は確かに駐車場に届いていた。黒々した人工的な輝きを放つそれに疲労感が募る。歩いた距離などたかが知れている。運転は小野木が受け持ち助手席に座っていただけだ。なのに、なんでこんなに疲れているのだろう。部屋へ戻ると、取材バッグを放り出しベッドに仰向けに体を投げ出した。

天井を見つめ、もう一度小野木の沈黙の原因を推察してみる。寄り添った哀しみの重さによるものだったのだろうか。無骨な外見にそぐわない感受性の強さを彼から感じ取っていた。

これほどの現実を知らされた私は、明日から何を取材すればいいのだろうか。彼の助けなしで伝えるべき真実に巡り逢えるのだろうか。一日を回想する由里に緩やかに睡魔が舞い降りて来た。

町村尚人

『悪くはない。が、何かに影響を受け過ぎの感もある』

身繕みつくろいを済ませた由里に、そんなメールが届いていた。私は小野木さんに感化されている？ 現地から遠く離れた人々を揺さぶることが出来るのは、惨状を収めた写真だけなの？ ここに来てみればいい、誰だって少なからず心を動されることだろう。確かに小野木の受け売りもあつたかも知れない。しかし、彼の言葉に強く賛同した由里にとって、デスクの批評には受け入れ難いものがあつた。

機器を通さない記憶だったが、そのどれもが鮮烈に由里の脳裏に焼き付いていた。指を止めることなく一気に書きあげた原稿を読み直す。それは四万字にも及ぼうかという力作となっていた。

ライティングデスクに貼り付けられた取材プランを何気なく眺める。荒浜から名取か……やはり、被害の甚大なところを見て回れてことなのよね。剥がしてクシャクシャと丸めゴミ箱に投げ入れる。そうじゃない——でも、どこに行けばいいんだろう？ 避難所を回ってみる？ また取材お断りって言われたらどうする？ 心細さと弱気の虫が由里のなかで不毛な議論を始める。

そこへ小野木から電話が入った。別れ際の沈黙など感じさせない陽気な声が、由里にとって降って湧いたような幸運に思われて頬が緩む。彼なら行くべき場所ぐらいいは提示してくれるはずだ。

——まだ、ホテルに居たか？ ちょうど良かった。尚が、仙ちゃんに見せたいものがあるそうなんだ。今日明日ぐらいいはこっちに居られるんだろう。俺の臭い車で辛抱出来るなら、付き合ってやってくんねえかな。

「是非、お願いします。でも、燃料代のこともありますし、私の車で——」

——尚にも事情があつて、そう言う訳には行かねえんだよ。細かいことは気にすんな。米軍のガソリンはタダなんだ——おっと、こ

れはオフレコで頼む。迎えに行かせるよ。三十分後ならいいだろう。」

「ええ、ですが——」由里の論駁は届かず「じゃあな」と言つて電話は切られてしまった。町村隊員の端正な顔が思い出され体温の上昇を感じる。取材意欲の表われよ、それに、あの顔は絶対に見覚えがある。突き止めるにはいい機会じゃない。そう言つて聞かせるが、鏡に映る顔は期待に綻ぶ。癢に障つて、いーつとしてみた。？いーつ？か——これを表現するには、どう書いたらいいの？ 睨む……強がる……違うわね。

いつの時代も誰に於いても、鬱ぐ気持を取り払つてくれるのは淡い恋心なのかも知れない。不毛だった自問自答は明らかに別の意思を持つそれへと変化を遂げていた。

洗車がなされたのか、FJクルーザーは見違えるように白く輝く。ホテルの玄関を抜ける由里に運転席から手を振る自衛官の姿が見えた。会釈して助手席に乗り込んだ。

「せつかくの休暇を取材に付き合わせちゃつてごめんなさい」

「俺がジュンさに頼んだんだから謝ることはないよ。こっちこそスケジュールを狂わせたんじゃないかって心配してたんだ。迷惑でなきや良かった」

「でも、何でこの車じゃなきやいけないんですか？」

「汚れたジャッキを積むのと、万が一のためのウィンチが必要だね。どう使うかは、行つた先で分かんと思う」

自衛官は小野木と同じような台詞を口にした。

「正直なところ、小野木さんに見せられた全てが衝撃的過ぎて、どこへ行けばいいのかさえ一人では決めあぐねていたんです」

小野木やカジと揃いのツナギに身を包んだ美貌の自衛官は、私と同じぐらいの年齢だろうか？ 由里の疑問を見越したように彼が自己紹介を始めた。

「町村尚人陸士長——つて言つても、任期は終わった。今は元の隊に戻るまでの猶予期間つてとこかな。二十三歳、牡牛座」

「元の隊？」

「こつちには災害派遣で来ているんだ。で、駐屯した所の方面司令が偶然ジュンさの幼馴染^{おさなしみ}だったって訳」

「ハッチね？」と確認する由里を慌てた様子で嗜^{たしな}める。

「書いてちゃダメだよ、それは。一等陸左は雲の上の存在なんだから」

由里は顎を引いて微笑んだ。

「仙道由里、週刊アクティブの記者です。何を見せてもらえるのかしら？ あなたはここでどんな仕事をしているの？ 小野木さん達との関係は？ あ、録音していいかしら」

尚人が年下であると判明したからだけではない。会話のイニシアチヴを握ることはスムーズに取材を進める上に於いて不可欠である、由里の口調がフランクになって行く。

「構わないよ。でも、何か取り調べにあつてみたいだな」

尚人の人懐^{ひとなつ}つこい笑顔が由里の脈拍を上げる。

「仕事は遺体の搜索だよ。ジュンさ達との関係は……一口じゃ説明出来ないな。農園で一緒に働いていたってとこかな」

「炊き出しとかもしているんでしょう、自衛隊の人って」

「あれは特科の連中、普通科の俺は最前線だよ。重機の入れない南三陸町ではチェーンソー片手に乗り込んでいったもんだ。満潮ともなれば津波で流された遺体もたくさん上がる。長いこと水に浸かっていたせいか、身体の一部がなかったり見つかるのが腕だけだったりでひどいもんさ。損傷が激しくって男女の判別さえ出来ないことだってある——前にも言ったっけ？これは。慣れる——いや、今も慣れてはいないけど最初の頃は飯も喉を通らなかったよ。ジュンさが言っただけでなかつたかい、国民総動員令を出させて。あれは冗談でも何でもなし。遺体の搜索は手作業なんだ。より多くの人出があれば、それが捗^{はかど}るのは分かるだろう？ テレビや新聞が復興、復興って言ってるけど、全ての遺体が見つかってやっと収束。復興はそれからじゃないのかな。少なくとも、家族の見つかってない人々にとって

は、そうなんだと思う」

「あなたの言う通りなんでしょね」

「水田は、潮と泥で沼地化してるから、棒を突っ込んで探すんだ。乱暴に掻きまわすと、遺体を傷つけちゃうから慎重にね。警察も消防も出張ってくれてるけど人手は足りていないってのが本当のところだよ」

由里はずっと気になっていた疑問を口にしてみた。

「ねえ、あなたの顔——どこかで見たことがあるんだけど」

くつきりとした二重瞼、美しい曲線を描く睫毛、形の良い鼻の稜線が、記憶のフラグメント（断片）に幾度も引つかかる。一度見た顔は忘れないのが、由里の特技だった。尚人は黙して答えない。

「きれいな顔ね、よく言われない？」

「きれいって言われるのは女みたいで嫌いだ」

尚人の声^{とが}が尖る。

「あ……ごめんなさい」

「どこにでもある顔だから見たような気がするんじゃないの？」

ねえ、由里さんはいくつ？」

尚人は露呈した不機嫌と由里の恐縮を、明るい声でまとめて振り払う。

「女性に年齢を訊ねるものじゃないわ——と、言いたいところだけど教えてあげる。二十五歳よ」

「へえ、俺^{ふた}よか二つお姉さんなんだ。敬語にしようか？」

「いいわよ、そんなの。でも、こんな風に休暇があるのね。自衛隊の人達って、もっとハードワークなんだと思っていたわ」

「休暇じゃなく、退官前の準備期間だってば。搜索は明るいうちだけしか出来ないけど、今も二十四時間体制は変わってない。駐屯地に居られた俺達はまだマシ。テント組なんか、風呂に入れない時期が二週間もあったそうだからね。災害派遣がない普段はのんびりしたもんだから仕方ないかな——由里さんはずっと雑誌記者をやってるの？」

「ええ、本当は違う部署に行きたかったんだけど空きポストがなかったの。写真週刊誌なんて何でも屋よ。経済、社会、芸能。言われれば何でも取材……」

自ら口にした芸能という言葉が引き金となって、バラバラだった断片が完璧に紡ぎ合わされた。

「NAO! —— あなたNAOでしょう。ポン太バンドの」

「ちえっ、ばれちゃったか」

言葉通りの悔しさは感じられない。

やはりNAOか…… 彗星の如く日本のロックシーンに現われ、立て続けにミリオンヒットを飛ばしたかと思ったら忽然と消息を絶ってしまったポン太バンドのヴォーカル兼ギタリストだったNAO。メディアへの露出が極めて少なかった彼等だったが、社に届いたPVを視聴した時の面影が、ハンドルを握る自衛官にピタリと重なった。

「何で、止めちゃったの？ 売れまくってたじゃない」

「中越地震が起きた時のことだ—— 高校生だった俺達—— 農園の仲間達ってことだよ。ジュンさに連れられて現地に入ると今回みたいなことをしてたんだ。でも本当に救助が必要な場所には立ち入れない。自衛隊や警察でないと危険だから、って入れてもらえないんだ。かつこよかったよ、どんな危険な場所にも入って黙々と作業をしていた自衛官の人達。だから、俺はいつか絶対に自衛官になろうって思ってた。ポン太バンドはロックを教わったジュンさへの恩返しさ。俺のために随分、迷惑をかけちゃったからね。叱られるかと思っただけ、そう言っただ俺にあの人は、好きにしろ、とたった一言—— 拍子抜けしちゃったよ」

遠い目をして語る尚人の声が思考の彼方に響く。芸能の特ダネまですでモノにしまった…… 収穫満載の取材旅行だわ。由里の記者魂に火がはいった。

「何でポン太バンドだったの？ メンバーの誰かのニックネームだったのかしら」

「俺が飼ってた犬の名前だよ。どうせ、すぐにやめちゃうつもりだったからこれでいつか、って感じでね」

「でも、勿体ないわ、あんなに売れてたのに。ねえ、芸能界に戻る気はないの？」

「由里さんもマスコミに居るなら分かるだろ？ 商業ペースに乗った音楽なんか、うんざりだ。着たくもない服を着せられ、歌いたくもない曲を歌えって言われる。アマチュア時代の方が好き勝手でできて楽しかったよ。あ、自衛官も同じだな。組織の中じゃあ、俺達は歯車の一つに過ぎない。搜索したい所があっても、命令が出ればそれに従うだけ。やりたい事をやるってのは案外難しいもんだね。勝手にそう呼んじゃってるけど、いいよね？ 由里さんで」

「ポチやタマでなければ、お好きにどうぞ」

「へえ、冗談も言えるんだ」

混ぜ返す尚人に由里は抗議の声を上げた。

「あなたといい小野木さんといい、私をどんな人間だと思っっていたのかしら」

「きれいなお姉さんだと思ってます」

挑発だとは分かっているけど、このきれいな顔で言われるとドキツとしてしまう。動揺を隠して別の質問を向けた。

「原発へは行ったの？」

「いや、あつちが別の隊が入ってる」

「あなたは原発をどう思ってる？ 録音は停めるから正直な意見を聞かせて。政府やＴ電の対応をどう思う？」

「どうなんだろう？ 情報を隠すとか小出しにするとか、いくつかでも炉心を残そうとしてた時点ではそういうこともあったろうけど、実際は放射線がどう人体に影響するか分かんないってのが本当のところじゃないのかな。しっかりした統計がある訳でもなし。参考になるのが二十五年前のチェルノブイリだけってんだから、とりあえず避難させとけて感じてなんじゃない？ 俺みたいな一兵卒に大した情報は伝わってこないよ」

多くの専門家が持論をまくしたてるテレビや新聞の方が情報は多いのかも知れない。被災者が現状をどう報道されているかを知らないように、現地入りした尚人達にも詳細は伝えられないのかも知れない。由里はどこか釈然としないものを感じていた。

「そういえば、使用済み核燃料はどうなるか知ってる？」

思考に沈む由里を尚人の涼やかな声呼び戻す。

「処理施設に送られるんでしょう？ 使用済み燃料から取り出したプルトリウムとウランを混ぜたのがMOX燃料なのよね。確か、三号機で使ってたのがそれだったはず」

「うん、でも日本の再処理工場は稼働してない」

「え……？ じゃあ、あの六ヶ所村にあるのは何なの？」

「単なる貯蔵庫になってるんじゃないかな？ 下手すりゃよその国のまで預かってるのかもよ」

勉強不足だった——ホテルに戻ったら、すぐに裏付けを取ろう。

「そもそも、高濃度放射性物質の最終処理が出来るのは世界中でフィンランドに一カ所あるだけだそうだよ。イタリアなんかマフィアが処理を請け負って、船ごと海中に沈めてた時代もあったそうだしね。今だってコンクリ詰めにして地中深く埋めてるか冷却と称して放置してあるんだろう。そんなことばかりやってるから地球が怒ったんだよ。地震も津波もそのせいだって考えたことはない？」

——地球が怒る——そう語る尚人の純粹さが眩まぶしく感じられた。

「だからといって、今まで散々原発の恩恵にあずかってきた連中までもが手のひらを返したようにバッシングに回るのもどうかと思う。今、現地入りしてる人達は決死隊だよ。身に降りかかる危険を顧みかえりずに作業をしてるんだから。」ヴィレッジをベースキャンプにしてたのも震災直後からだったんだけど、報道されたのはつい最近だよ。何であんなものにまで報道管制が敷かれるんだろう？ 反対派だって怖くて近寄りやしないだろうに。ただ、計画停電を脅し文句にして原発の維持を企んでるとしたら、電力会社も政府もずるいと思う。大企業や病院が自家発電を備えれば、火力や揚水で電力

は賄^{まかな}えるんじゃないかな。原発の津波対策にかけろお金があるなら、再生可能エネルギーの開発に回すべきだよ」

「すごく考えてるのね。自衛官の人って、みんなそうなの？」

「情報はあるんだ。考えろ、吟味して組み立てて結論を導き出せ。えへへ、これはジュンさの受け売りだけどね」

そう言つとペロリと舌を出して笑う。釣られて、由里も微笑んでしまった。

「影響力のある人よね、小野木さんって。昨夜送った原稿をデスクからそう批評されたわ。主観が入り過ぎてるって言われたわ」

「デスク？」

「副編集長のことよ」

「いいんじゃない？ 純粋な客観性は成立しえない。少なくとも量子学に於いては、そうなんだそうだ。不確定性原理を拡大解釈しておけばいいさ」

「難しい言葉を知ってるのね」

「このあいだ読んだ小説に書いてあったんだ。でも、俺はジュンさの言ってることが間違つてるとは思わない。由里さんもそう感じたから書いたんだろう？」

「そう……かも、知らないわね。ねえ、あの人はなんであんなに一生懸命なの？ 確かに被災者の方はお気の毒だわ。でも、見ず知らずの人々のために仕事も奥さんも放りだして来られるものかしら？」

車は女川街道に入っていた。一昨日の苦い記憶が、見覚えのある建物の残骸から視線を逸らせる。そんな由里には気づいてない様子で尚人はおかしそうに語り始めた。

「昔から変なんだよジュンさは。大きな災害が起きると俺のせいかも知れない、なんとかしなきゃって騒ぎだすんだ。強迫観念だけで生きてんじゃないかってくらい慌てふためく。例えるなら雷に怯える犬みたいなもんだ。美代ちゃん……あ、ジュンさの奥さんのこ

とだ——美代ちゃんも呆れてた。ジュンさはいつも言ってたよ。人は愚かだから間違いを犯すのは仕方ない。俺はもう三十六回も過ちを犯してる。でも、それを恐れて何も出来なくなってしまうんじゃない。進歩がない。償いと人の痛みからは絶対に目を逸らすんじゃない。て。それを身を以て俺達に示してくれてるんじゃないのかな」

「何の数字？ その三十六っていうのは」

「さあ……泣かせた女性の数かな？ 訊くと不機嫌になるんだ。ずるいだろ」

そう言えば九年がどうか言っていたな、とむさ苦しいヒゲ面を思い浮かべる。若いころはモテたのかも知れない。頼もしさと知識は評価出来るとしても、あの言葉遣いとデリカシーのなさは減点対象ね。トータルして男性としての魅力は五十五点といった所かしら——小野木が知ったら大きく肩を落とすことになったろう採点が由里の中でなされる。

「でも、それって不公平じゃない？ 小野木さん達が行く所には物資も届けばシャワーも浴びられる。行かない所には——」

「平等とか公平って言葉は数の上でしか成立しない。個人の頭の中でさえ感情と理性が不平を主張し合ってるじゃないか。それが複数になれば言わずもがなだよ。あの人は、そんなことも分かってやってるんだ。カジさんの器用さが俺にあれば……尚ほみたいに歌で人を動かすことが出来るなら……そう言っでは、いつも悔しがっている。もっと多くの人を呼ぶことが出来ればもっと多くの人の力になれるのに、ってね。人は選択を繰り返すだろう？ 時には間違っていることを承知で選ぶことだってある。そして、その選択が正しかったか否かはもたらされる結果で判断するしかない。ただ、その時点での判断が正しかったように思っても未来においてそうだとは限らない。思考錯誤を繰り返すしかないんだよ、俺達は」

反論を看破したかのように尚人が言葉を被せてきた。あなたは本当に二十三歳なの？ どうしてそんなに人生を真摯に見つめることができるの？ 恋人との会話、上司や先輩社員との会談、膝を詰め

て話しあつたことがない訳ではない。ただ、尚人のように真つ直ぐな主張をぶつけてくる男性は初めてだった。シニカルに物事を見ること、熱くならないことが人間としての成長であると考えていた自分が間違っているように思っていた。取材対象と距離を置くことが客観を生むのだとの間違いに気づかされた。拙劣な反論は知らず知らずのうちに彼等に傾倒してしまいそうになる自分を押し止めるための鎧だつたのだ。今、それには大きな亀裂が入っている。

尚人の表情と言葉が、柔らかさを取り戻した。

「固い話になっちゃってるな、面白いことを教えるよ。俺が知り合う前のことだけど、ジュンさは婚約者を病気で亡くしてるそうなんだ。それも自分のせいだって思い込んでたみたいだね。嘘か本当か知らないけど、その婚約者のお骨を『俺の一部にするんだ』って言うて食べちゃったんだってさ。デタラメだろ？」

由里はにこりとして頷いた。

「でも、楽しいオヤジなんだよ。ボクシングの世界チャンピオンで鈴木雄一郎って居るだろう？ あいつはカジさんの愛弟子。それとモトクロスの世界選手権で去年MX2でランキング4位に入つた本田正、あいつはジュンさんにバイクを教わつた。みんな農園の仲間なんだ、俺達はそこで育つたみたいなもんさ。色んなことがあつた。泣いたり笑ったり喧嘩したりもしたけど、あの頃がなければ俺はここに居ないと思う。由里さんも一度遊びに来るといいよ。秋は美味い梨が食えるし、俺達が苗から育てたブドウや野菜もある」

「是非、お伺いしたいものだわ」

……あなたが居るなら……声に出来なかった部分が心の中でリフレインされた。

理由（わけ）

車は緩やかな坂道を登り始める。

「私に見せたいものって何なの？」

「もう十分で着くよ」

そこからの話題は、ポン太バンドのベーシストも農園出身者だとか、小野木が燃えてなくなった眉毛を油性マジックで書き足していたとかいった他愛のない思ひ出話に終始した。今のあなたが知りたい、あなたのことを話して。願いを込め尚人の横顔に送る視線は、交わった瞬間に意気地を失う。

「こんな高台にまで津波が押し寄せていたのね」

「うん、二十メートルの高さがあつたんじゃないかって言われている。あれを見てよ、あんなものがなぎ倒されるくらいなんだ」

小高くなった場所に車を停めて見おろすガレキの町には、五階建て程度のビルが横倒しになっていた。残った建物も扉や窓があつた跡は虚ろに口を開き、剥がれ落ちた壁からは鉄骨が剥き出しになっている。墓地に横たわる電車はどこから流されてきたのだろう。声にならない声を押し殺すかのように由里は手で口を覆った。『一度でいい、足を運んでみる。誰もが何かを感じ取れるはず』小野木が語り、尚人が代弁を重ねた言葉が津波のように押し寄せてきた。

「ここだよ」

積み上げられたガレキが邪魔をして校名までは読み取れなかったが、明らかに学校然とした建物の門を抜けて上ってゆく。車から降り立った尚人を、校庭を走り回っていた子供達の一人が目留め、大きく手を振りながら駆け寄ってきた。遅れて気づいたもう一人も、その後を追う。

「ナオー」

「尚人さんって、言えってば」

その言葉にも表情にも辟易の色はない。尚人は二人の頭をガシガシと乱暴に撫でる。

「いいじゃん。ヒゲ魔人も、鉄仮面もナオって呼んでるんだから」
小野木とカジのことを言っているようだ、安直だが二人の特徴を上手く捉えた子供らしい表現に由里はクスリと笑う。

「ちえっ、まあいいや。海地も大地も元気にしてたか？」

「あたりきい、俺達から元気を取ったら何も残らないぞ。誰だ？
このきれいなねえちゃんは。ナオのカノジョか？」

「バツカヤロー、雑誌の記者さんだよ。お前等を写真に撮ってくるんだってさ」

そんな思い切り否定しなくてもいいじゃない——由里の小さな消沈は、次の瞬間、尚人が赤らめた頬に打ち消される。思わず声が弾んでしまう。

「仲が いい のね、ここへはよく来るの？」

「うん、ここいらの搜索をしてた時に知り合ってたね。時間が許す限り来てる」

尚人が「J」クルーザーを指差して、少年達に告げる。

「お土産があるぞ。ちゃんと、みんなで分けるんだぞ」

「分かってるって」

二人の少年は慣れた様子でテールゲートを開くと、彼等の上半身が隠れてしまいそうな程の段ボール箱をそれぞれに抱えた。尚人の手招きに他の子供達も走り寄って来る。全ての子供達に段ボール箱の運搬を割り当てると、体育館の入口に辿り着き重いドアを開こうとしていた海地と大地に、口に手を添えて言った。

「ヒゲ魔人と鉄仮面のおじさんも、金出してんだからなあ。顔見たら礼を言っとけよ！」

「えー、じゃあこれ食ったら俺にもヒゲ生えちゃうのかあ？」

「あはは、かもな」

PVの中のNAOはこれっぽっちも笑顔など見せなかった。コンサート会場の埋め尽くしたファンの誰一人として、こんなNAOは

知らないはず。そんな優越感が由里の胸を熱くした。

背中ではドアを支えながら通りぬけて行く子供達を眺めたまま尚人が呟く。

「あいつら、両親を津波で流されてるんだ」

「え……」

「うちの隊がここに入ってた頃は、余震も今よりずっとデカくて頻繁で、壊れかけた建物には俺達だって怖くて入れなかった。でも、あいつ等ときた、どこへでもちよろちよると入っていつちゃう。危なっかしくて見てられなかった。何を探してるんだって聞いたら父ちゃんと母ちゃん、そう言った。だから、俺が探してやるから壊れかけた建物には入るなって約束させた。隊を辞める一番の理由はこれなんだ。あいつ等と一緒に両親を探してやらないといけない。そのために自由な時間が必要になった」

「今も見つかってないのね？」

「分かんない……写真がある訳でもないしね。だから安置されてる遺体の中にあいつ等の両親が居るかどうかさえ確かめる術もない。そこに連れて行くことが正しいのかどうかも分からない。ジュンさ達もそうしないのは、きつと迷っているんだろうと思う。俺は、もししたら永遠に見つからない方がいいのかも知れないって思う事がある」

ぼつりぼつりと話す尚人の表情は悲しげだ。二人の少年が体育館の窓から顔を覗かせた。隣で会釈する女性は祖母なのだろうか。

「なおー、さんきゅー」

「可愛い子達ね」

「だろ？ 海地が小三で大地は小一。ジュンさもカジさんも養子にしてもいいって言ってただけだよあの御面相ごめんそうだからね。あいつ等の方が怯えちゃって——」

小さく笑った尚人の許に、荷物を置いた二人が戻ってきた。

「なおー、歌ってくれよ。いつものヤツ」

「ああ、一緒に歌おうぜ」

春よ来い、春が来た、唱歌と童謡のメドレーは、シャウトもヘツドバンキングもないまま、魅惑のハイトーンが正確な旋律を奏でる。^{かな}小野木の調子^{ちょうし}つ外れ^{はず}な歌を伴奏したバックパッカーの音色さえ次元が違ふものに聞こえていた。天が二物を与えたのはカジさんだけじゃないよね——聞き惚れる由里の耳に懐かしいメロディが飛びこんできてサビの部分^{ぶんぶん}をハミングした。

「さあ、父ちゃんと母ちゃんを探しに行くぞ。吉井のおばちゃんに出掛けるって言うて来い」

うん、分かった。二人の少年は、数十メートルの往復など全く気にならないかのように全力疾走を繰り返す。

「最後のはエリック・クラブトンのチェンジ・ザ・ワールドでしょう？ 死んだ父がよく口ずさんでいたわ。バンドの曲はやらないのね」

「あれはここ向けじゃないよ。正体がバレるのもどうもね……チェンジ・ザ・ワールドはジュンさんに一番最初に教わった曲なんだ。ここの人たちは当事者なのに情報の絶対量が不足している。星を一つ手にとって真実を照らし出してやろうって歌詞が相応しく感じられて歌ってる。でも、あいつ等に真実を知らせていいのかな。一ヶ月も行方が分からなきゃ、両親を諦めるしかないって真実を」

由里は再び表情を曇らす尚人への^{さいと}済度を^{もさく}模索する。

「被災孤児の支援には、多くの企業や団体も立ち上がるみたいよ。孤児のための基金だっただくさんあるわ」

「子供のあいつ等がどうやってそれを受け取るんだ？ それにあいつ等に必要なのは金なんかじゃない」

「親戚は近くに居られないの？ さっきの方はお婆さんではないの？」

「吉井さんのことかい？ 隣に住んでたおばちゃんだそうだ。ここの面倒を見てくれているんだ。ジージとバーバは俺達をここへ連れてきてから、父ちゃん達と一緒に車で家に戻った。海地は俺にそう言ってたよ」

言葉にするのも憚^{はば}るかのような小声は、肩を並べた由里でさえや
つと聞き取れる程度のものだった。

「そうだったん……だ」

「伯父夫婦が千葉に居るって言ってた。でも、あっちも液状化現象で買ったばかりの家が傾いちゃってそれどころじゃないんだってさ。家を買った当初は例の大遊園地が近いから、いつでも遊びに來いなんて自慢してたそうだ。連絡を取ったジュン^{なげ}さが嘆いてたよ。たかがネズミの着ぐるみ見物のために埋立地なんかにか家を買うんじやねえよ、って。——何度も何度も嘆いてた」

尚人も同じ想いだっただに違いない。声を落としたままの端正な顔を、苦惱^{ゆが}が歪^{ゆが}ませていた。

搜索

「由里さん、足のサイズは？」

「二十三センチよ。何故、そんなことを訊くの？」

「じゃあ、これだ。靴の中に敷いというて。薄い鉄板が入っているから小さな釘なら踏み抜いたりしないで済む。ガレキも金属片が混じっているから、素手で触れないように」

厚手の手袋と包装されたままの靴の中敷きを手渡される。

「あなたが、用意してくれたの？」

「まさか——靴のサイズまでは分からないよ。俺がここに由里さんを連れてくるって言ったらジユンさが持たせてくれたんだ。ガサツに見えるけどこういった気配りは抜かりない。美代ちゃんも、よく驚いてたもんだよ」

そうなんだ……人は見かけによらないとはよく言ったものね。小野木の意外な一面に由里の採点は六十点まで引き上げられた。

「ねえ、美代ちゃんって方は小野木さんの奥さんなんでしょう？ あなたより随分、年上のはずよね。そんな呼び方でいいの？」

「美代ちゃんは今中二と中三の時の俺の担任だったんだよ。俺達は、みんなそう呼んでいた」

尚人の声に懐かしき憧憬が滲む。中学生ぐらいの少年が若い女教師に恋心を抱くのはよくあることだとは知っていたが、あのNAOでさえそうだったという事実が微笑ましくもあり、まだ見ぬその女性に妬みを感じてしまう由里だった。

「ここからだったか？」

うん、と二人の少年が元気に答える。

ルーフラックから下ろしたアルミ製の梯子を伸ばし、露出した屋根の梁に滑車をぶら下げる。垂れ下がった底部分をウィンチで引き上げ、倒れた鉄骨にブロックを重ねてジャッキで開口を確保する。

二次災害への対策が手際よく行われると、尚人と由里は少年達を伴って崩れかけた建物へと足を踏み入れた。水産加工の工場だったらしい。足の踏み場もないほどのガレキが床面を覆い、一歩進む度に割れたガラス片が足元で音を立てる。

「分かったかい？ この車じゃなきゃいけない理由が」

「ええ、JAFみたいな機材はこう使うのね」

崩れ落ちた天井材や柱の散らばる工場設備をすり抜けて少年達は、どんどん建物の奥に進む。対して大人の体格である由里と尚人は、体が通り抜けられる隙間を探すことに苦労していた。時には息がかかるほどの距離に体を寄せ合い、時には手を引いて誘導される。何度も触れる肩や腕に由里の体温は上昇を続けた。鼻をつく魚の腐臭など気にならなくなっていた。

「最初の頃はレッカーを借りてクレーンで吊り上げてたんだ。ただ、誰の家かも分からずにやってるからあまり目立つのもね——持ち上げ過ぎて壊しちゃった家もある。あ、俺じゃなくジュンさだよ、あの人は乱暴だから」

尚人は慌てて釈明した。

「とにかく、こんな風に一軒一軒、とことん探し回らなきゃ海地達は納得しないからな。ガレキで道路がなくなっている所もあつて、この町に住んでたあいつ等じゃないと、どこまで調べたのか分かんなくなっちゃうんだ」

目印になるような建物など残っていないのだから、ストレンジヤーの尚人ではやむを得ないことだ。そんな協力体制が彼等に強い絆を構築させていたのだらう。

「おーい、そんなに奥に行くんじゃないって」

「遅いよー、ナオは」「ナオはー」

兄弟の非難がユニゾンで廃屋に木霊する。二人は顔を見合わせて笑った。

「ねえ」

「なんだい？」

「エリと付き合っていたんでしよう、今はどうしてるの？」

由里はモデル出身のタレントとの交際を報じたスポーツ誌の記事を思い出した。

「あれか……俺が自衛官になるって言ったら、ダサイって言って去って行ったよ。全員が同じ服装で同じ行動をすることは無個性に思えて受け入れられないんだってさ。いつだってそうだった。この顔のせいで人間の上っ面しか見ようとしないうる連中しか寄って来やしない」

尚人が思いを馳せる過去を想像してみる。美形には美形の悩みとあったものがちゃんと存在するのだ。生まれ持ったものがどれほど素晴らしくとも、それだけが人に幸福をもたらすものではないのだと彼は語っているようだった。

「私は偉いと思うわ。あのまま続けていれば何不自由ない暮らしだっただけ出て来たのに、それをなげうつてまで、見知らぬ人々を助けようとしているのだから」

「じゃあ、由里さんが彼女になつてよ」

予期せぬオファーにドギマギして、つんと言いつつたつもりの語尾が揺れる。

「お姉さんをからかうもんじゃない……わ」

「ふたつしか、違わないじゃないか」

短い不平の後、尚人はこう続けた。

「俺も由里さんを偉いと思うよ。仕事のためだったんだろ？」

ICレコーダーを探しに、あんな真つ暗な街に来てたのは。使命感に衝き動かされたってヤツかな。迎合をよしとしないいい目をしてる」

後半は尚人の言葉らしくない。会話のイニシアチヴを取り戻すべく由里の反撃が始まった。

「それも、小野木さんの受け売りなんでしょう？ 分かっているんだから」

「じゃあ俺の意見を言おう。眉毛は半分しかなかったけど颯爽と

してて格好良かったよ。あんな事の後だったのにジュンさに噛みついたそうじゃん、美代ちゃんみたいだな。媚_こびないって言うのかな、俺はそうゆう強い女性が好きなんだ」

反撃は簡単に途絶えた。ちつとも私のことなんか見ていないと思つたのにあの暗がりの中、眉毛までチエックしていたのね。重なる眼差しにぴくりと肩を震わせる。ガレキが発する音、少年達の掛け声、全てが由里から遠ざかっていった。

「もう暗くなる。続きはまた明日だ。俺かヒゲ魔人の居ない時は、建物に入るんじゃないぞ」

尚人が今日の搜索終了を少年達に告げる。小さな体でガレキを持ち上げ続けた彼等の表情は疲労からか、作業に入る前の澁_{はつらつ}刺さが消えていた。

「……うん」

「どうした？ 元気がないじゃないか。おまえ等から元気を取つたら何も残らないじゃなかったのか」

尚人が機材を運ぶ手を止めて言った。

「そうだけどさあ——これだけ探してめっからないとなると、みんな海に行っちゃったんじゃないかなと思ってさ」

「バツカヤロー！ おまえ等が諦めてどうすんだよ。分かった——次からは俺一人で探す。おまえ等はもう来なくていい。明日は迎えに行かないからな」

「諦めてなんかないない！ そうだろ？ 兄ちゃん。きっと父ちゃん達、腹を空かせて待つてる。早く見つけてやんないと」

大地少年に鼓舞_{こほ}され、兄の海地が瞳に力を取り戻した。

「尚には入れないところだってあるじゃん。俺達と一緒にやなきや見つけれもんか」

力強い笑顔を少年達に向け尚人が廃墟を指差した。

「ようし、その意気だ。明日はあれとあれとあれ。三つ回るぞ。早く迎えに来るから、寝坊するんじゃないぞ」

「津波にさらわれた可能性が高いんでしょう？ 行方が判らなくなってもう一ヶ月以上。あなたはいつまで続けるつもりなの？」

「どっちか片方じゃなく二人がもういいって言い出すまで続ける。あいつ等の気持を繋ぎ止めて^{つな}いるのは肉親を探す^とっていう、その思いだけなんだ。あんな小さなあいつ等が避難所でも一度も涙を流していないって吉井さんは言ってた。あいつ等の気持が切れた時、俺にはどう言ってやればいいのか分からない。俺がそれを見つけるか、あいつ等が諦めるか——それまでは無駄だと思えても搜索を続ける」

尚人の視線は、車の進行方向の更に彼方^{あなた}を見据えていた。

「松島海岸は行ったことある？」

「大学時代に一度きり——きれいな海だったわよね」

「帰り道だ、少し寄って行こう」

駅前ロータリーの石畳は歪みアスファルトは泥で覆われている。ヘドロの海になっていたと聞いたが整備が進んだのだろう。夕暮れの海はかつてと変わらぬ景観を湛え穏やかに佇^{たたず}む。

道中、目にしたようなガレキの山は片付けられているようだった。

車を降りて歩く土産物屋が立ち並ぶ通りを、来るべき長期休暇の観光客を期待してか懸命に清掃に励む人々が居た。

「小野木さんが言ってたんだけど、こっちに來てからは誰も殺しちやいないって——あれもお芝居の一環よね？」

「勿論さ。それにジュンさは末っ子だからね。どこか甘いところがあるんだよ。最初は、捕まえた泥棒もレイプ野郎も、説教だけくれて逃がしちやってたんだ。例え被災者だろうと、自暴自棄になって犯罪に手を染めるような連中には厳しくすべきだ。そして、全ての要求に手を差し伸べてはいけない。それは、彼等自身が立ち上がるうって意志まで奪ってしまうことになる。カジさんはジュンさにそう言った。高校生の頃、両親を亡くし弟の面倒を見てきたカジさんに、ジュンさんのような甘さはないからね」

「で、あなたの意見は？」

「俺はその中道なちだうを行くよ」

「察するに、あなたは次男坊ね」

怪訝けげんそうな目で由里を見ると、寂しげな笑顔を浮かべ尚人は言った。

「いや、俺は私生児なんだ——親父は居ない」

軽口が思わぬ方向に作用した由里はそれを悔やむ。

「……ごめんなさい」

「謝る必要はないよ事実なんだから。それに俺にはジュンさや力ジさん、美代ちゃんも農園の仲間達も居る。寂しくなんかない。ジュンさは特定の誰かを贖ひいきすることはなかったけど、俺がジュンさに抱く感情は両親の揃そろっていた他の連中とは違っていたと思う」

私も居るわ——あなたが望むなら、ずっと寄り添よそっていてあげる。海は色彩を増して沈みゆく太陽を映し出す。触れる肘が——肩が、二人の距離をごく自然に縮めて行った。

決意

「尚……尚じゃないか？」

野太い声に向き直った尚人の口元が緩む。土産物屋の店先で談笑していた初老の男が近づいてきた。鋭い目つきには気の弱い者なら睨み殺してしまいそうな迫力がある。

「岸田さん——いらしてたんですか。いつも、お世話になってます」

「世話になつてるのはどつちだろうな。お前達が送り込んでくれる人足のお陰で片付けも随分捗ったぞ。カジと小野木は元気にやつてるのか？」

「ええ、世のオヤジどもに見せてやりたいくらいです。こんなにバイタリテイに富んだ五十歳も居るんだって」

男が大きな笑い声を上げた。

「確かに、あいつ等は異常だよ。よろしく伝えておいてくれ、こんな近くに居るんだからもつと顔を見せろってな」

「分かりました。御苦労さまです」

男は土産物屋に戻り、店主と思しき女性と再び話し始めた。

「今の人は？」

「岸田さんっていつて、カジさんの古い知り合いだよ」

「もしか……積み上げた記憶を広げ、推測の接着剤で繋ぎ合わせて行く。注意して見ると、通りを清掃する一団は、地元の間人でもなければボランティアの風体でもなかった。二の腕や首筋に派手な絵柄を覗かせているのも一人や二人ではない。視線を振った先、由里の目が髑髏のプリントに釘付けられた。

「ちよつと……あれ……」

「見つかつちやつたか——由里さんの予想通りだ。ジュンさ達が捕まえた連中は、全員岸田さんと共に引き渡して強制的にボランティアをさせている」

「でも、あの人達って……」

「そうだ、ヤクザって呼ばれる人達だよ。でも彼等はガレキの撤去や町の清掃、支援物資の運搬を黙々とやっている。報酬を期待することもなくね。分かるだろう？ ジュンさの言ってたことが。こんな言い方は失礼だけどヤクザと呼ばれるあの人達でさえ、この窮状きゆうじょうを何とかしたいと思っているんだ。他人事だと思って享樂きやうらくばかりを追いかけてる連中に気づいてもらわなきゃいけない。そうでないと、この国はダメになっちゃうんだ」

由里は書いた。情報の届かない被災地の人々が本当に必要としているものが何であるか、震災孤児たちを救うために何をすべきかを感化されたのではない。彼女の——そして小野木達の内なる叫びが文字となつて迸はなはちる。

『上出来だ。ここまでやってくれるとは思ってなかった。一日、休暇をやる。のんびりと温泉にでも浸かってくるといい。しかし今時そんな奇特きせきな連中も居るんだな』

奇特——メールにあった、その二文字に反撥を覚え、デスクの直通電話をコールする。

「すぐに社に戻ってまとめます」

——そうじゃない。確かに記事は素晴らしい。ただ、俺の独断で全てを掲載して良いかどうか判断が出来んのだよ。編集長も同意見だ。スポンサーあつての本誌だからな。社主にも目を通してもらう必要がある。その間、取材の疲れを癒してこいつてことだ。

「報道されない真実をとの依頼だったはずですが」
携帯電話を握る手に力が入る。

——大人になれ。綺麗事きれいごとだけで社会が成立しているなんて、君だつて思つてはいないだろう。裏は取れてないが俺でさえ知らない事実があつたのだな。君を見くびっていたようだ、これからは他もどんどん取材に出す。その事なんかすぐに忘れるさ。以上だ」

一方的に電話を切られる。

事実を知らされてなお、手を差し伸べようとさえしない人がここにも居る。寒々とした感覚に囚われた。小野木達が抱く焦燥感しょうそうかんの理由が分かる気がした。幾ら書こうとスポンサーの意にそぐわねば記事として掲載されることはないのか——由里は無力感と同時に怒りを覚えた。

ふと思いつき社の別の番号を呼んだ。

「上川部長、仙道です。そちらにメールしてもいいでしょうか？ 原稿を読んでいただきたいんです」

——こんな老兵の批評が聞きたくなったのか？ いいだろう。S h i z a i b u . k a m i k a w a @ で送ってくれ」

狭いバスタブで冷えた体をしっかりと温め、ベッドに入った後も由里は寝付けずに居た。テーブルスタンドに置いた携帯電話がけたたましい音で鳴った。

——大作だな、よく調べ上げたもんだ・

「そこに書きました通り協力者のお陰なんです。彼等の力になってあげたいんです。デスクの様子では全てが記事になるようでもないみたいで……どうしたらいいのでしょうか？」

——うむ……

電話の向こう、上川が思考に沈む様子が伺えた。

——私が一線を退いた理由しりぞは知っているかな。

時の総理の政治献金に纏まつわるスキャンダルをすっぱ抜いたものの、社内コンセンサスは得られず上川は他誌に漏らした。しかし、それは陽の目を見ることなく社主の激昂げうこうを招いただけだった。半月後、その事件は秘書の自殺により国民の前に露呈された。彼が第一線を退いたのはそれが原因だと聞いていた。

「ええ、おおよそですが」

——ジャーナリズムの限界を知って嫌になった。養うべき家族のため社には残っているが、今や俺は屍しかばねみたいなものだよ。君も俺み

たいになりたいか？

「上川部長が屍だとは思っていませんが。ただ、手をこまねいて
いるだけの自分は許せないと思います」

上川の沈黙が語られる。由里は固唾^{かたず}を呑んで待った。

——君の決意は分かった。すべきことをした俺に後悔はない。君
も自分の信じた道を行けばいい。記事にはならなくとも書く場所な
んでいくらかもある。他誌にリークしてやろう。掲載^{けいさい}される保証は
ないがな。細かい打ち合わせは君が戻ってからだ。デスクの前では、
従順なフリをしておくんだぞ」

「分かりました、ありがとうございます」

そうだ。書く気になれば場所はどこにでもある。ラップトップを
起動して記事を見なおし、自分の言葉に代えてゆく。アカウントを
取得したのみで放置してあったページを開き、ブログサービスがあ
ることを確認すると、暫く考えてからタイトルを打ち込んだ。

『東日本大震災の今、そして我々が向かう未来』

Sacrifice (犠牲)

「そうか、帰るのか」

レッカー車とFJクルーザー、たった三名の総動員で搜索活動をする小野木達を見つけるのに大した時間はかからなかった。黄色くボディをペイントされたレッカー車は、灰色の町では否応なく目立つ。

「はい、色々とお世話になりました。記事をまとめたらボランティアを募^つつてすぐに戻ってきます。避難所に足りない物資を教えてください。調達してきます」

小野木は目を細めうんうんと満足そうに首を振る。ヘルメットから覗く髪とヒゲは強風で巻き上げられた埃でグレイに染まっていた。「ありがとな。でも先ずは仙ちゃんのすべきことをしつかりやってきてくれ。俺達は、ずっとここで待っている」

二人の会話が耳に届いた尚人がにこやかに手を振る。もう一方の手にはクレーンのリモコンが握られていた。空^{から}の荷台には海地大地の二人が陣取り、死角となった場所から送られるカジの指示を尚人に伝えている。荷台後部での受信は海地、そこから尚人までの伝令が大地と兄弟ならではの連係プレーを見せていた。

「上げろつてさ」「了解」

建物の間口を塞いだ鉄骨が持ち上がる。

「上げるには上げてても屋根が邪魔になつてブームが振れないぜ。そこからどう挿し入れるんだよ」

「ちよいとごめん。そう言つて小野木が由里から離れ、吊り上げられた鉄骨に向かう。尚人を振り返つて叫んだ。

「いいぞ、そのまま降ろせ。ゆつくりとな」

ひと抱えもありそうな幅の鉄骨に小脇に抱えていた太いロープを掛けると、小野木が背中を向けて引つ張り始めた。

「嘘だろ……ばけもんか、ジュンさは」

あんぐりと口を開けてズルズルと動き出す鉄骨と、背筋の盛り上がった小野木の背中を交互に見つめる。段差に引つかかるとカジが長い鉄棒でこじ上げる。少しずつではあったが鉄骨は確実に建物の中に挿し入れられて行った。

「あれって何十キロもあるんでしょう？」

「いや、何百キロだろうな。ったく、かなわねえよ。あの二人には」

ジャッキを取りに戻る小野木の体は、噴き出した汗に埃が張り付いて髪やヒゲと同化してしまっていた。にやりと笑って拳を振り上げる。

「鍛え方が違ったよ。まだまだお前には負けねえぞ。こいつはかなり骨組みが危なくなってる。余震がくるとヤバイ、ガキどもを入れる前に天井の梁を釣り上げておけよ」

建物を指差す小野木に尚人はおどけて敬礼した。

「了解っ、ヒゲ司令」

クレーン作業と同時進行で小野木とカジがジャッキを咬み込ませる。挿し入れた鉄骨が台座代わりだ。入っていいぞ、との声に少年達はレッカー車を飛び降りると黄色いヘルメットを目深に被った。

「垂れ下がってる鉄筋に気をつけるんだぞ」

「あいさー、ヒゲ魔人」

「司令に魔人か……好き勝手呼びやがって、ちきしょうめ」

由里は苦笑する小野木から視線を戻し、尚人の正面に立って言った。

「じゃあ私はこれで。明るいうちに帰って少しでも記事を整理したいの。出来るだけ早く戻るわね」

「うん、待ってる」

絡み合う視線と断ち難い想いを引き剥がすようにして由里はRAV4へと足を運ぶ。立ちくらみ？ ゆらゆらと小さく揺れた足元が台地から持ち上げられようとしていた。余震なの？

「危ないっ！出る」

小野木が上げる声に由里が振り返ると、建物に飛び込んで行く尚人の後ろ姿が目に入った。

「だめだっ、入るんじゃない」

制止より早く尚人が体をくぐらせる。クレーンで引き上げられたワイヤが緩み、軒庇のきびさしが大きく傾ぐかし。ジャッキなど噛み砕いてくれんわとばかりに口を閉じようとする一メートル四方の開口部が悲鳴を上げて撓たわみ始めた。小野木が壁に張り付いて後手で堪える。足を伸ばし支えになるような物を探るが土煙が上がるのみだった。

「カジっ！クレーンを上げろっ！尚っ！早くガキどもを連れだせっ」

「分かってるって」

くぐもった声だけが聞こえ尚人の姿は見えない。

カジがワイヤーを巻き上げるより一瞬早く、軒庇はガタンと音を立てて小野木に覆い被さった。

「小野木さんっ！」

カジの呼ぶ声に、少し遅れて小野木の声が返ってくる。

「大丈夫だ……慎重に上げる。尚、ガキどもはまだか？」

「確保した。今、出るよ。開口の保持よろしく」

「任せろっ」

由里は口に手を当てたまま足が竦すくんで動けない。歪になった開口部に少年の黄色いヘルメットが見えた。

「後、五秒堪えててくれ」

続いてもう一つの黄色いヘルメットと共に尚人が頭を出す。彼等が抜け出ようとする隙間は四十センチほどに縮まっていた。

「よし、出たぞっ」

獲物を仕留め損なった廃屋の歯軋はきしりが聞こえ、大きな衝撃音と共に口が閉じられた。立ち上がって走りだす尚人達を確認すると由里の膝から力が抜け、その場にしゃがみこんでしまった。良かった……間一髪のフィナーレにとめどなく涙が溢れだした。

「危ねえ、危機一髪だったな。おまえ等、怪我はないか」

「うん、どこも痛くない。危なかったなあ」

少年の目線に合わせて体を屈め、無事を喜ぶ尚人の首に血の筋が伝った。今になって恐怖が襲ってきたのだろう。大地少年が大きな声で泣きだす。

「怖かったか？ もう大丈夫だ。ヒゲ魔人のお陰だな」

「尚、耳の後ろから血が出てるぞ、消毒しておくんだ。今日はこれまでだな。その子達を送って避難所の様子も見てきてくれ。あの余震の規模だ、怪我人が出てなければいいが」

「了解っ」

カジの放り投げるポリ容器を受け取ると、ザバツと無造作に振りかけて血を洗い流す。P Vの中のN A Oは繊細で、ともしれば神経質にさえ映った。目の前で別人のような振る舞いを見せる尚人から感じる^{たくま}逞しさに、由里は彼が年下であることを忘れていた。

「大丈夫？」余震と動揺が収まり、腰を折ったままの尚人に歩み寄って覗きこむ。髪に覆われ傷の深さは分らないが、既に止まりかけた出血が大きな怪我ではないことを示唆する。安堵の息が漏れた。

「心臓が止まるかと思っただわ」

「もうダメかもって俺も一瞬は思っただけだね。彼女になってくれるって返事をもらうまでは死ねないよ。ジュンさは？」

普段なら一番賑やかなはずの男の声が聞こえてこない。尚人は周囲を見回した。崩れ落ちた建物の前、ここからでは下半身しか見えない小野木と、その傍らに茫然と立ち尽くすカジの姿があった。

Duty Knight（誇りまみれの騎士）

「さつきは、ごめん……つい……呼び捨てに……しちゃったよ」
「いえ……私は小野木さんにそう呼んでもらえる日を待っていました」

覆いかぶさった軒庇に隠れ正面から見えない部分——突き出た鉄筋が小野木の右鎖骨付近に突き刺さり左の脇腹に先端を覗かせていた。みるみるうちに小野木のシャツはどす黒く染まり、壁を持ち上げ続けた両手の指は塞がった壁に潰されていた。

「ジユンさつ」

駆け寄った尚人が腰を屈めて小野木を仰ぎ見る。

「お……う、尚……か、ガキどもは……無事だろうな」

「うん、かすり傷ひとつない。カジさん救急車は？」

沈痛な表情でカジが答える。

「呼んだ……だが、あの大きな余震の後だ。今は全て出払っているらしい」

「司令に頼んで、救護班を呼ぶ」

無線機のある車へ向かおうとする尚人の背中に声がかかる。

「ダメだっ！」

瀕死の小野木の、どこにそんな大声を出す力が残っていたのだろう。尚人の動きが止まった。

「これ以上……この人達を死なせちゃいけね……え……俺はもう充分に生きた……後回しで結構だ。カジさん……農園を頼む。美代ちゃんにも……謝っておいてくれね……え……か」

「小野木さんの口から伝えて下さい」

滅多に感情を表に出すことのないカジの表情が大きく歪んだ。

「そう……だな、また……叱られそうだ……」

咳こんで血の泡を吐く。

「小野木さんっ」

「でけえ……声だな……美代ちゃんか？ 来て……くれた……のか」

「仙道です」

「仙……ちゃん……か、すまん……後は全……て託す……書いてくれ……よな」

「書きます。記事にならなければブログでも自費出版でもして書きます。だから、もつと話を聞かせて下さい」

濃紺のデニムが汚れるのも厭いとわず、ひざまずいて見上げる由里に小野木は小さく頷いた。

救急車のサイレンは聞こえても遠ざかるものだったり通り過ぎて行くものだったりで、向かってくる車影しゃえいはない。尚人は小野木の居る場所と見通しの効く場所とを何度も行き来する。

「暗くなってきた……な、もう夜……か」

「何、言ってたんだよ。目え開けて寝惚ねぼけてんじゃねえよ」

尚人の罵倒は涙声になっていた。

「尚……じゃねえのか？ なんだ丈たける……だったのか」

「タケぼんは八歳だろうが、俺だよ」

「冷てえ……野郎だな……まだ、怒ってんのかよ……言っておくが母さんを恨むんじゃねえぞ 悪いのは全部……俺なんだ……」

「何言ってたんだよ。俺だよ、尚だよ。ジュンさつてば」

「……ちえ……そんな……に親父と認めるのが嫌か……毎朝供え……物届け……手も合わせてやったのによ……お」

「誰に言ってたんだよ！ しっかりしてくれよ」

「ん？ やつぱり尚……なの……か……金……なん……持って帰……れ。苦勞し……お前を育て……くれたおふくろさんを……楽させて……やんな」

幻覚でも見ているのか、途切れ途切れの言葉は意味を成さない。

「ジュンさが居なきや俺もダメだったかも知れないんだ。すぐに救急車が来るからな。俺を置いてなんかいかせねえぞ。由里さん、声を掛け続けてくれ」

「こえ？ 何か……乗っかつて……のか……重くはねえ……何
……で……う……動けねえ……ん……だ……冷えて……きた」

「小野木さん、仙道です。あなたのお嬢さんと同じ名前の仙道由
里です。分かりますか？」

今、やつと小野木への反発の理由が分かった。死んだ父親の面影
を重ね合わせていたのだ。全身埃まみれで壁に礫はりつけにされた彼の姿は、
グレイの鎧を身に纏った勇猛な騎士の姿を彷彿とさせた。

「ちようど……い……ボリウム……だ……やれば……出来る……

……」

小野木の声が止まる。虚空を見上げて見開いた目は光を失い、半
開きになったままの口から続きが発せられることはなかった。

「小野木さんっ！」

由里の叫びに尚人が駆け戻る。

「ジュンさつ！ジュンさー」

物言わぬ灰色の骸むくろとなった小野木に縋むって泣き崩れる尚人の背後
に、泣きじゃくる弟をなだめていた海地少年が立つ。

「ナオー、ヒゲ魔人どうしちゃったの？」

少年に背を向けたまま、尚人は小さな声で呟いた。

「ヒゲ魔人じゃない。この人は……この人は俺の父さんなんだ」

数時間後、レスキューに拘束を解かれた小野木の居た場所に座り
込んだまま、尚人は動こうとしない。由里は意見の衝突することの
多かった父の葬儀で手足を失ったような喪失感に襲われていた自分
を思い出した。どんな言葉を以てしても尚人の哀しみを癒すことな
ど出来ないことは分かっていた。息の詰まるような想いを抱いたま
ま、由里はただ黙って尚人に寄り添っていた。

ふいに立ち上がった尚人がFJクルーザーへ向かった。「なお……
……」後を追おうとする由里を手で制し、バックパッカーの入ったケ
ースを取り出して戻る。小野木が引きずった鉄骨に腰かけると、低
音弦のハンマリングオンから演奏が始まる。

—— Would you know my name if
I saw you in heaven ——

救急車のサイレンに集まり、再び散開しかけていた人々の足が止まる。ガレキを掘り返す人々、廃屋を見上げて佇む人々、当てもなく廃墟を彷徨っていた人々、全ての視線が集中する中、尚人の歌声は土煙の街を鎮魂歌^{レクイエム}で包みこみ、水平線の彼方——海と空が交わる場所へと流れて行くように思えた。彼が見上げる空を人々も見上げる。エンディングをゆったりとしたダウンスケールでまとめると大きな拍手が沸き起こった。

「これは毎晩、ジュンさが歌っていた曲なんだ。俺は生涯を賭けて謝り続けなきゃいけない人が二人居る。それを忘れないためにも歌い続けなきゃいけないんだってね」

「確か亡くなったお子さんに贈った歌よね？ 父がそう言ってたわ」

「うん……何でも『好きにしる』のジュンさが、この曲だけはコンサートで歌うことを許してくれなかった。スコアも見せてくれなかったんだ。難しい曲じゃないから俺は勝手に覚えただけど人前で歌うことはなかった。これが初めてだよ。そしてこれからはジュンさの代わりに俺が歌ってゆく」

「きつと小野木さんも喜んでくださると思うわ」

「俺はジュンさの遺志を継ぐ。自主制作でいい、曲を作って歌い続ける。一人でも多くの人がこの地に足を運び、何かを感じてくれることを祈って歌い続ける。それがきつと俺の使命なんだ。俺の歌が誰かの心を動かせるなんて大それたことは思っちゃいない。たった一人でも被災地に目を向けてくれる人が居ればいい。この悲劇を忘れないで居てくれる人が一人でも増えればいい。そうなってくれば俺が歌うことに意味はあると思う」

六〇七歳ぐらいの少女が小さな花束を携えて近づいてきた。

「これ——」

一言そう告げると、くるりと踵を返して走りだす。「ありがとう」

受け取った尚人の返事が遅れた。

タンポポ、シロツメクサ、ノジスミレと色とりどりの小さな花束を小野木の立っていた場所にそっと置く。血溜まりを避けたそこにはバックパッカーが墓標のように立てかけられていた。

終章

「復帰したお前が居ると分かれば、追っかけ渋滞が起きて地域の人に迷惑がかかる。雄一郎達が大勢のボランティアを連れて合流してくれるそうだ。慌てて戻る必要はないぞ」

無表情を取り戻したカジの言葉は冗談とも本気ともつかず、尚人を困惑させる。

「アルバム一枚作ったら戻るってば。それまで海地達の面倒を頼むよ」

「ああ、任せておけ」

じゃあ行ってくる。見送るカジを残して尚人と小野木の遺骨を乗せたRAV4は発進した。

「一体、これはどういうことなんだっ」

ライバル社の写真週刊誌を投げ出して、デスクが吐き捨てた。

「協力者と行動を共にしていたのは私だけではありませんでした。デスクがお迷いになっているうちに、あちらが先に記事にしまったのではないだろうか」

「ではこの炎上してるブログは何だ？ ニックネームがAT-Lord、a thousand lord——仙道じゃないのか？ ブログを起こすのは構わん。ただ、社費で取材した記事を載せるのはモラルに欠けた行為と言われても仕方がないぞ」

液晶ディスプレイをぐいっと捻って由里に向けた。今もって膨大な検索数がある？ ポン太バンドNAO？ の検索ワードに引っかかるようにしておけば放っておいてもアクセスは上がる。あれだけのネームバリューだ——使わない手はない。上川の助言を取り入れ、尚人の許可を得て彼等の復活を匂わせる記事を織り交ぜた。山ほど寄せられるコメントは、とても返信する気になれないほどの件数だった。

「any time lord——常に支配者——なのでは？ スペルが違います。それより私が取材してきたものは記事になるのでしょうか？ 早速まとめに入ろうと思うのですが」

「今は原発の方の動きが大きい。あっちに入ってる連中が送ってくる原稿の手直しを頼む」

「約束が違うように思われますが」

そう言ったものの、デスクの反応は予想された範疇はんちゆうを越えてはいない。由里はシナリオ通りの台詞を読み上げているだけで、そこには反発も諦観もなかった。

「状況が変わったんだ。君は言われたことをやって居ればいい。以上だ」

「分かりました。短い間でしたがお世話になりました。本日をもって退職させていただきます」

予め用意した退職願いを差し出す。「なっ……」呆氣にとられたような表情のデスクを残し、由里はさっさと編集室を後にした。

「終わったわ」

緑のイメージカラーいろに彩られたカフェで待つ尚人は、見慣れたツナギと小野木のように短く刈り込んだ髪かみの飾らぬスタイルで、街行く人々を眺めていた。伸ばし始めたばかりの無精ヒゲは端正な尚人の顔に決して似合うものではない。それでも客や店員の多くがちらちらと彼の様子を伺っていた。

「ここが日本の一号店？」

「ええ。お互い一からのスタートでしょう？ 相応しいんじゃないかと思つて」

「そうだな——行こうか」

暮れかけた歩道に二人の長い影が伸びる。軽く触れた指先が互いを求めて絡まり、どちらからともなくきつく握り合った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8218v/>

鎮魂歌（レクイエム）は混沌の彼方に

2011年8月23日13時51分発行